

東洋學藝雜誌第四卷第七十四號

明治二十年十一月二十五日發兌

○

熱學講義第六回(教育博物館ニ於テス)

第一高等中學校教諭 村岡範爲馳

固体ハ右ノ定律ニ從テ膨脹スル者デスガ、最初申上<sup>マツシアゲ</sup>タ通  
 リ、熱ヲ段々加ヘルト分子ノ運動ノエ子ルヂーガ漸々大<sup>オホキ</sup>  
 クナル、若シ其エ子ルヂーガ一定ノ度ヲ達シタ時ニハ、終  
 ニハ隣リ同志<sup>ドツシ</sup>ノ分子ガ互ニ固着シテ居<sup>レ</sup>コガ出來ヌ様ニ  
 成テ固体ノ組立<sup>クミタテ</sup>ガ瓦解スルデセウ、之ガ固体ノ融解シ始  
 メル處デス、此時ノ温度ヲ融解点ト云フナリ、温度ガ融  
 解点ニ達シテカラ猶止間<sup>ヤミマ</sup>ナク熱ヲ加フレバ、温度モ矢張  
 リ先<sup>ビシ</sup>ノ通りニ止間<sup>ヤミマ</sup>ナク昇ルカト云フニ、左様<sup>ソウ</sup>デナイ、其時  
 ハ温度ノ昇<sup>ノボリ</sup>ハ暫時休息シテ、加フル所ノ熱ハ、尽ク分子ヲ  
 分離スル爲メニ用ヒラレマス、熱カ分子ヲ分離スル間ハ、  
 分離ノ爲メニ仕事ヲ奏スル故ニ、其熱ハ運動ノエ子ルヂー  
 ヲ強クスル方ニハ用ヒラレ無<sup>ナイ</sup>デ、位置ノエ子ルヂーニ變  
 化スルナリ、夫ダカラ固体ノ全体ガ融解シテ液体ト成ル

迄ハ、温度ハ少シモ昇ルコガ出來ヌナリ

分子ト分子トノ間ノ引カハ、物体ニ依テ異ルカラ融解点  
 モ亦必ス然ラサルヲ得ス、次ニ一二ノ數ヲ舉テ之ヲ示ス

氷 〇〇〇、

硫黃 一一一、

鉛 三二五、

銀 一〇〇〇、

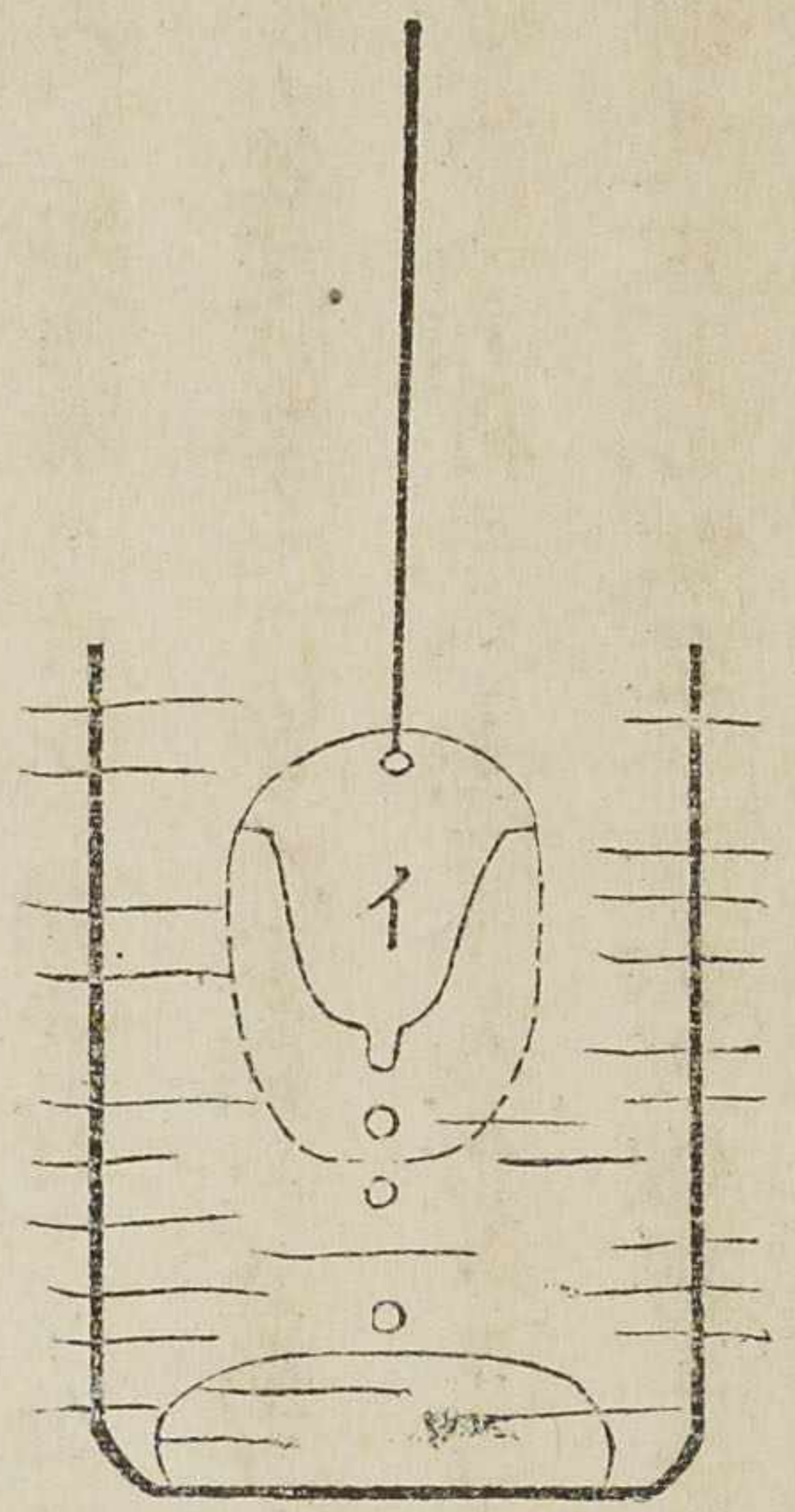
錫 二二〇、

カドミウム 三二〇、

ビスマス 二六五、

合金ノ融解点ハ通例其成分ノ融解点ヨリ小ナリ、例ヘバ  
 鉛ニ二百二十度、錫ハ二百三十度ノ融解点ヲ有ス然ルニ質  
 量三分ノ鉛ト五分ノ錫トヨリ成ル合金ハ、僅カ百八十度  
 ノ融解点ヲ有シマス、又有名ナルウー<sup>ー</sup>ト氏ノ合金ナル者  
 ハ、凡ソ一二分ノカドミウム、七八分ノビスマス、二分ノ  
 錫、四分ノ鉛ヨリ成ル者ニシテ、既ニ六七十度ニシテ融解  
 シマス、私ハ學藝雜誌第五十號ニ融解点ノ低キ合金ノ表  
 ヲ掲載シ置キマシタ、茲ニウー<sup>ー</sup>ト氏ノ合金ハ眞ニ六七十

第三十五圖



度ニテ融解スルヲ示ス爲メニ試験ヲ施シマセウ、第三十五圖(イ)ハグート氏ノ合金ニテ、之ヲ糸ニテガラス瓶ノ中ニ鈎リ下ゲ置キ、溫度凡ソ七十度ノ水ヲ瓶中ニ注ギ込メバ、此通りニ融解シテポトポト落チテ來マス(寫繪器械ニテ示ス)

熱ノ寒暖計ニ感ズル者ハ運動ノエ子ルヂーナリ、融解ノ爲メニ費サレル熱ハ分子ノ位置ノエ子ルヂーニ變ズルカラ寒暖計ハ之ヲ感ゼヌナリ、此熱ノ事ヲ融解熱ト云フ、寒暖計が感シ無イカラ其熱ハ何處ヘカ潜<sup>ドコ</sup>レテ仕舞々様ニ見ヘル、其故物質論者ハ之ヲ潜熱ト名ケマシタ、此語ハ當時モ差支ガナイカラ矢張用ヒラレテ居マス、併シ當時ノ潜熱ノ説明ハ右ニ述ヘタル通りニテ、古昔トハ丸<sup>マル</sup>デ變<sup>カワ</sup>ツテ居ルナリ、融解熱ハ物体ニ依テ差等アリ、例ヘハ氷一キログラムノ融解熱ハ凡ソ79カロリトナリ

液体ノ溫度ヲ段々ト低クスルルハ、運動ノエ子ルヂーカ減ズルニ從テ、分子ハ互ニ相近ヅキ、終ニ進行ノ速度ヲ失ヒ固体トナル、之ヲ液体ノ凝固ト申シマス、凝固ハ融解ノ反對ナルガ故ニ融解ノ時ニ費シタル潜熱ハ凝固ノ時ニ現レ出ルナリ、即チ液体ノ時、位置ノエ子ルヂーニテ存セル熱量ハ今變ジテ運動ノエ子ルヂートナルナリ、又凝固点ハ融解点ト同一ナリ

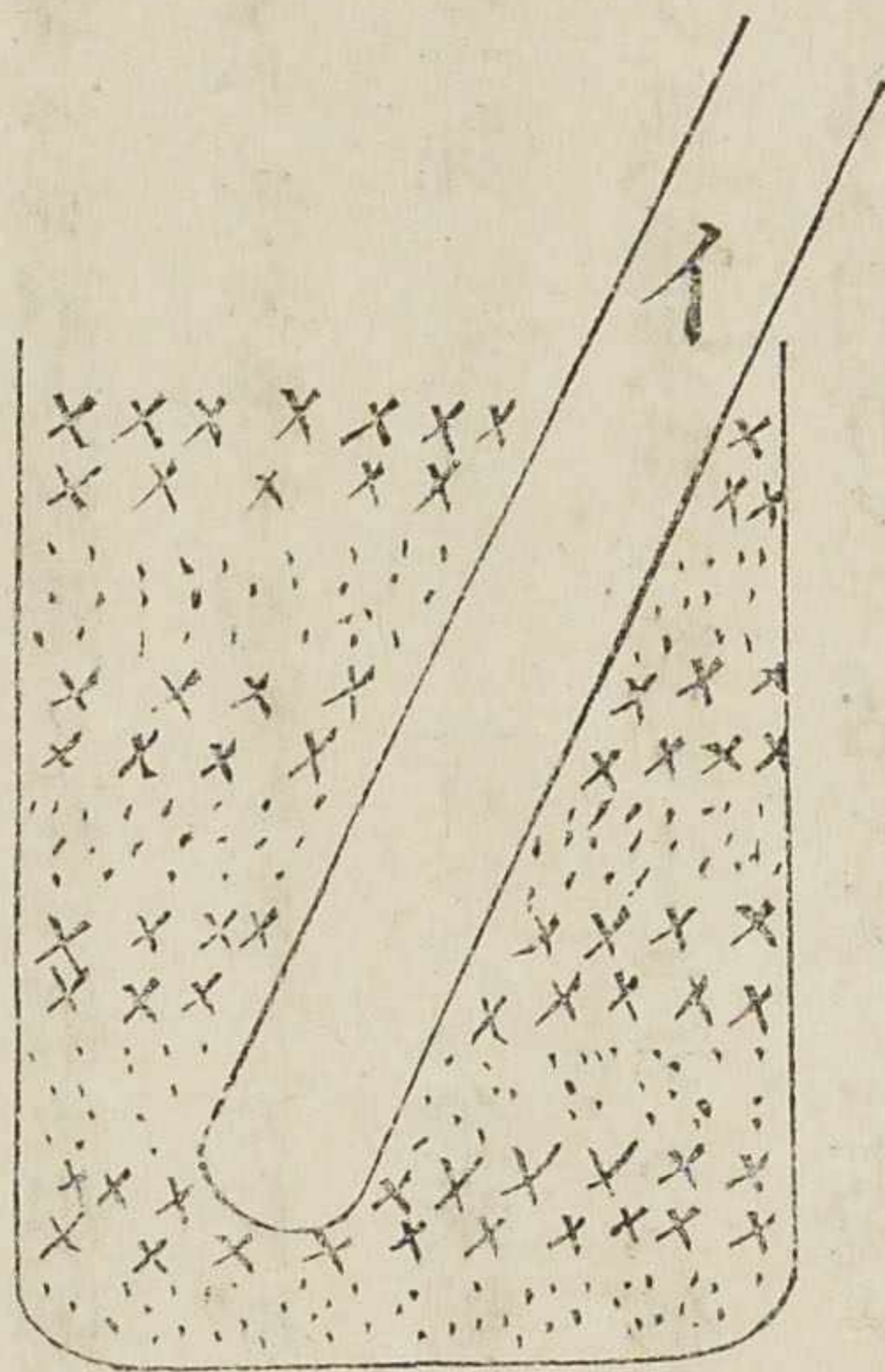
グート氏合金ハ凡ソ六七十度ノ融解点ヲ有ス、其成分ノ融解点ハ各々二百度以上ナリ、左レバ成分ヲ別々ニ細末ニ爲シ、別々ニ二百度迄温ムルレバ、一ツモ融解スル者ハ無、ケレモ、若シ二百度ノ四物ヲ一處ニ混スレバ必ズ直チニ融解スルデセウ、之ト同シ事ニテ、食鹽ト氷ノ混合物ハ零下、隨分、低キ融解点ヲ持テ居マスガ、零度ノ氷ト零度ノ食鹽ヲ細末ニ爲シタル者ハ、別々ニ置ケバ共ニ固体ナリ、併シ之ヲ混合スレバ急ニ融解シテ液体トナルナリ、底デ其混合物ノ溫度ハ矢張り零度ニ止マリ居ルカト云フニ、何か變化ガ有ルニ違ヒナイ、何ナレバ先刻御吐<sup>ヨハナシ</sup>シタル通り、固体ガ液体ニ成ルニハ熱ヲ費サ子バ成ラヌ、然ルニ今外

カラ少シモ熱ヲ加ヘナイノニ、此變化ヲ生ズルカラ、混合

層重子、又其上ニ雪ト、段々ニ積ミ上ゲ、右ノ試験管ヲ以テ

カラ少シモ熱ヲ加ヘナイノニ、此變化ヲ生ズルカラ、混合物ノ内ニハ多少温度ノクルイカ起ルデ有ウト云フコハ、理ノ分り易イ者デス、依テ寒暖計ニテ温度ヲ計テ見ルト、凡ソ零下二十一度デス、斯ク著ク温度ガ降ルハ如何ナル譯ゾト云フニ、食鹽ト氷トハ分子ノ固着ヲ解ク爲メニ、自分自ラ有スル所ノ熱ヲ使用シタルナリ、即チ混合前ニハ零度ニ適スル運動ノエ子ルヂーガ兩体ノ内ニ存シテ居タ

第三十六圖



ルガ、混合ノ際ニ之ヲ用ヒテ分子ヲ分離シ之ヲ位置ノエ子ルヂーニ變ジテ仕舞タカラ、其丈テ寒暖計ガ感ゼヌ様ニ成タノデス、此現象ハ世俗デ氷菓子ヲ作ルニ用ヒマスガ、此處ニ一ツ其試験ヲ御目ニ懸マセウ、第三十六圖(イ)ナル試験管中ニ氷ト爲スベキ液ヲ入レ置キ、大瓶ノ中ニ食鹽ヲ一層敷キ、其上ニ雪又ハ成丈ケ細末ニシタル氷ヲ一

層重子、又其上ニ雪ト、段々ニ積ミ上ゲ、右ノ試験管ヲ以テ攪交ルト、暫時ニシテ管中ノ液ハ氷結スルナリ、試験管ノ代リニブリキ製ノ小管ヲ用ユレバ氷結速ナリ、此混合物ヲ寒劑ト云フ

固体混合物ノ融解点ガ低イト同様ニテ、液体ノ混合物又ハ鹽類等ノ溶液ハ成分ヨリ低キ凝固点ヲ有ス、例ヘハ海水ハ零下凡ソ二度ニ於テ凝固スルナリ、又鹽類ヲ水中ニ溶解スル時ハ鹽ガ液体ニ變スルニ從テ其温度ガ下ルナリ、之ヲ試験ニ徵センニハ、水中ニ空氣寒暖計ヲ入レ置キ、上ヨリ少シ食鹽ヲ入ルレハ、御覽ノ通り温度ノ降ルノガ能ク分リマセウ、夏分冷水ノ無キ所ニハ、薄キ入物ニ清水ヲ入レ此入物ヲ大桶ノ水中ニ入レ、桶ノ中ニ食鹽ヲ澤山入ルレバ、可ナリ冷キ、飲料水ヲ得ルコトガ出來ルナリ

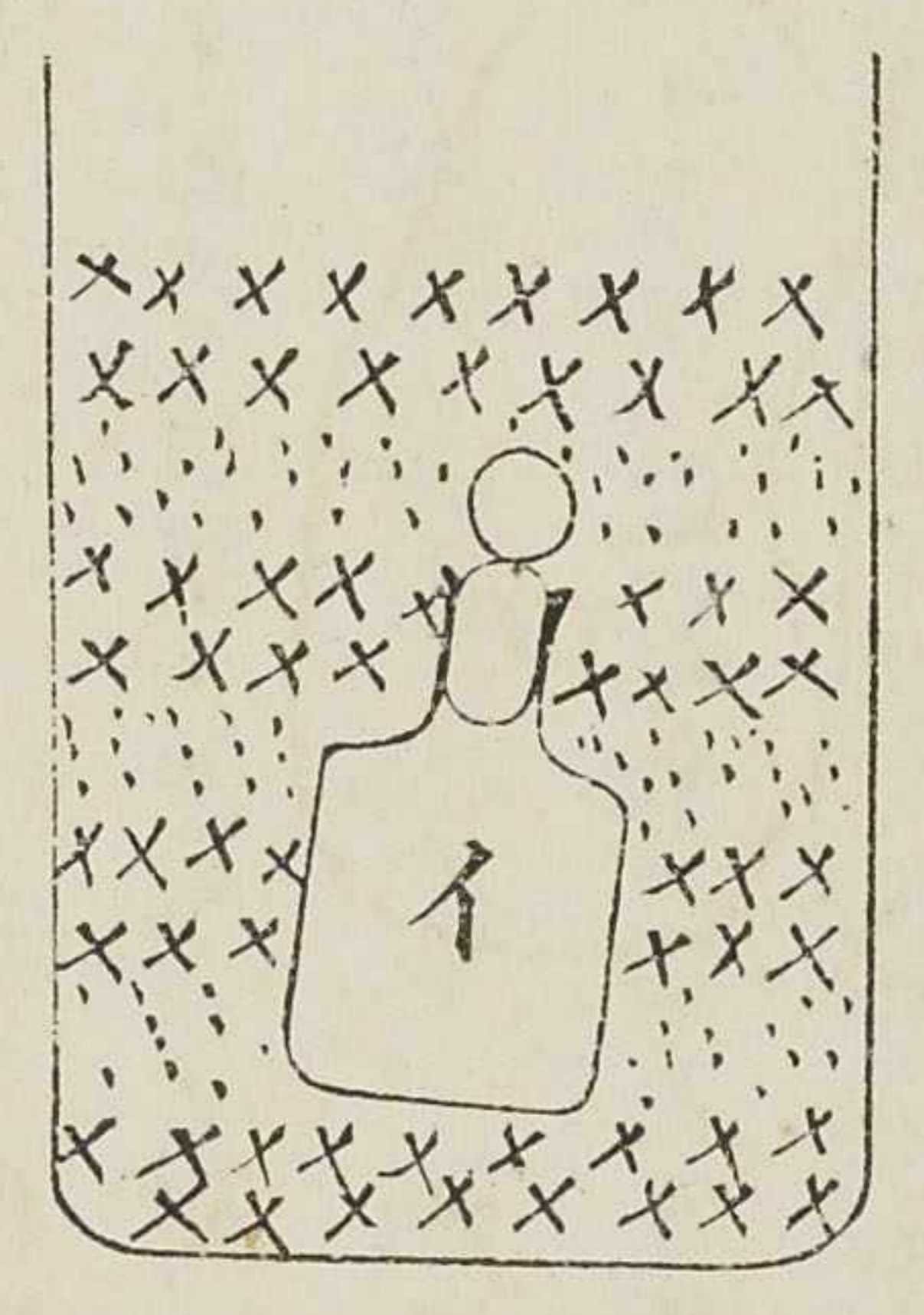
固体ノ融解ハ、分子間ノ距離ガ遠クナルニ依ルトスレバ、融解ノ時ニハ是非立積カ大キクナル道理デス、其ハ眞ニ然ルコトナリ、左リ乍ラ物体ニ依テハ返テ收縮スル者ガアル、ビスマス及ヒ氷ノ如キハ其例ナリ、諸君御存ノ通り氷ノ水上ニ浮フハ、氷ガ融解ノ際ニ其立積ヲ減スル爲メニ

比重が大<sup>フ、キ</sup>クナルカラデス、然レバ氷ノ分子間ノ距離ハ、融解ノ時ニ小<sup>チサ</sup>ク成ルカト云フニ、然ラス、矢張り大クナルニ違ナイガ、是ニハ少<sup>スコ</sup>シ他ニ立積ノ減ズル原因ガアル、試ニ之ヲ説明シマセウ、

一塊ノ氷ハ無數ノ結晶ヨリ成リ、一結晶ハ又多數ノ分子ヨリ成ル、氷ハ結晶体ダト云フコハ、雪ヲ見レハ能ク分ル、雪ヲ詳カニ驗スレバ六角形ノ花ノ様ナ規則立チタル形体ノ寄<sup>ヨリアツマ</sup>集リナリ、氷ハ雪ト粗密ノ差ハアレモ分子ノ組立ハ同シ者ナリ、一塊ノ氷ヲ僻<sup>ダトヘ</sup>テ言ヘバ、金米糖ヲ箱ノ中ニ詰メタ様ナ物ナリ、金米糖一粒ノ中ニテハ、砂糖ノ分子ガ一定ノ小距離ヲ以テ固着シテ居レド、二粒ノ金米糖ノ距離ハ、針ガ澤山出テ居ルカラ割<sup>ワリアイヨキ</sup>合大イナリ、若シ一箱ノ金米糖ヲ火ノ上ニテ温メ之ヲ融解スレバ、針カ無クナルカラ全体ノ距離ガ狭<sup>セバ</sup>マリ、箱一杯ニハ満タヌ様ニ成ル、氷ヲ融解スルモ之ト同様デ、二分子間ノ距離ハ廣ガレモ、二結晶間ノ距離ハ狭<sup>セバ</sup>クナル、其狭<sup>セバ</sup>リガ廣<sup>ヒロマ</sup>リヨリ大ナル故ニ、全体ノ立積ガ減ズルナリ  
氷カ融解スル時ニ収縮スルカラ、水ガ凝固スル時ニハ膨

脹セ子バ成ラヌ、私ハ之ヲ示ス爲メニ一ツ試験ヲ施シマセウ、第三十七圖(イ)ナルガラス瓶ノ中ニ熱湯ヲ入レ、固ク口ヲ閉ヂ、之ヲ冷セバ口ガ収縮スルニ從テ固ク栓ヲシメル故ニ、中々栓ハ引<sup>ヒツバ</sup>張ル位デハ拔ケヌ様ニナル、今之ヲ

第三十七圖

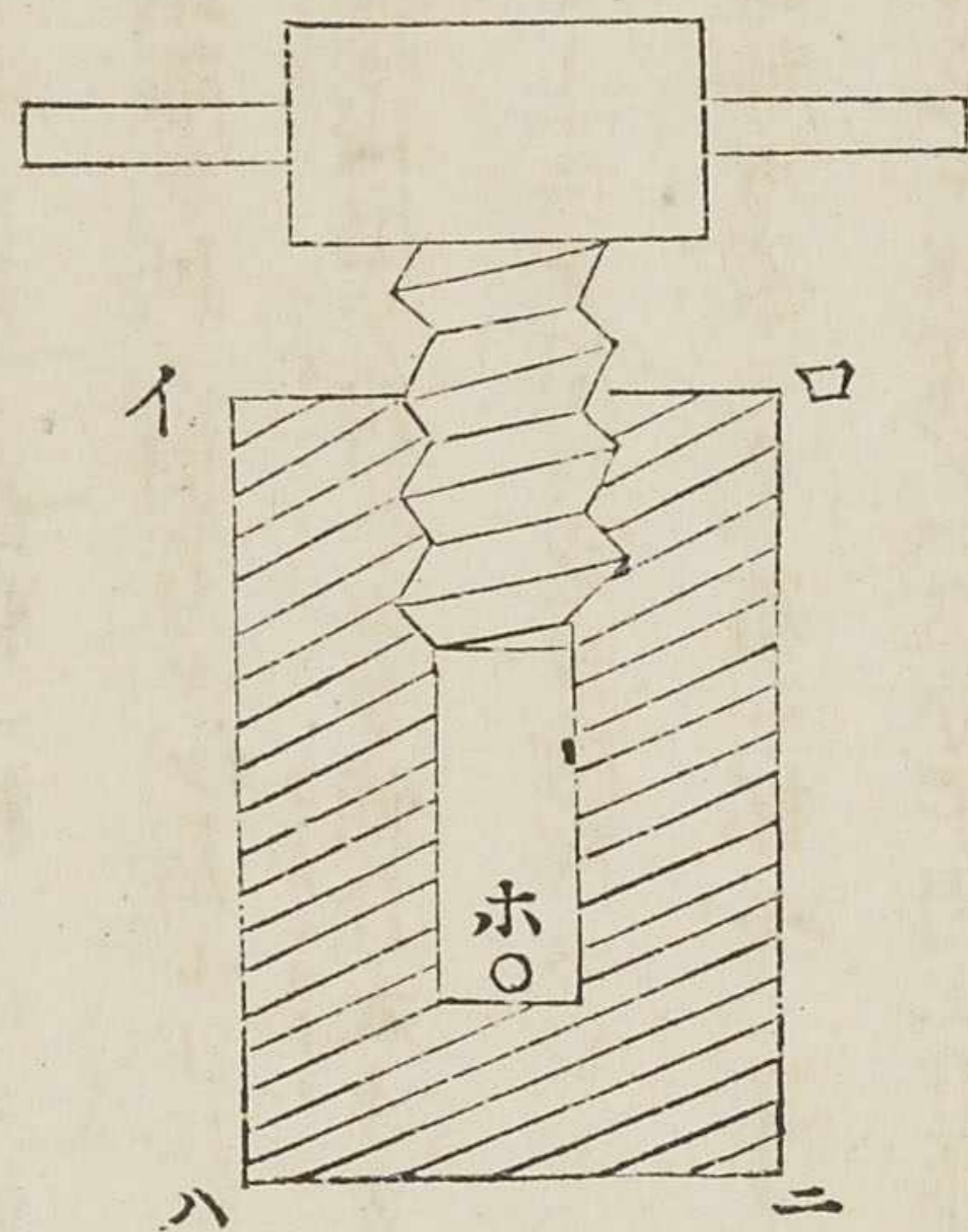


寒劑ノ中ニ入ルレバ、水ガ次第ニ零點ニ達シ、漸々膨脹シテ瓶ヲ中ヨリ壓シ、終ニ栓ヲ壓シ出シテ

氷結スルニ至ル、若シ栓ガ餘リ固キモハ瓶ガ破裂スルナリ  
右ノ試験ニテハ栓ハ固シ、ガラス瓶ハ充分堅固デ無イカラ、碎<sup>コバ</sup>レテ仕舞マシダガ、若シ充分厚キ鐵ノ如キ者ニテ入物ヲ作り、碎レヌ様ニ爲セバ如何ト云フニ、其時ハ水ハ零度以下ノ温度ニ下ルモ凝固シナイ譯ナリ、何トナレハ氷トナルニハ結晶セ子バ成ラヌ、結晶スルニハ以前ヨリ大ナル場處ガ要用ナリ、今其場處ヲ與ヘズノ結晶サセヨウト云ノダカラ行<sup>イテ</sup>ナイ譯デス、其真ニ然ルト云フハ適當ノ裝

置ガ無イカラ此處デ御目ニ懸ルコトガ出來マセンガ、唯如  
 何シテ其試驗ヲ爲スベキト云フコトヲ申上マセウ、第三十  
 八圖(イロハニ)ハ、極メテ丈夫ナル厚壁ノ鐵箱ナリ、箱ノ中

第三十八圖

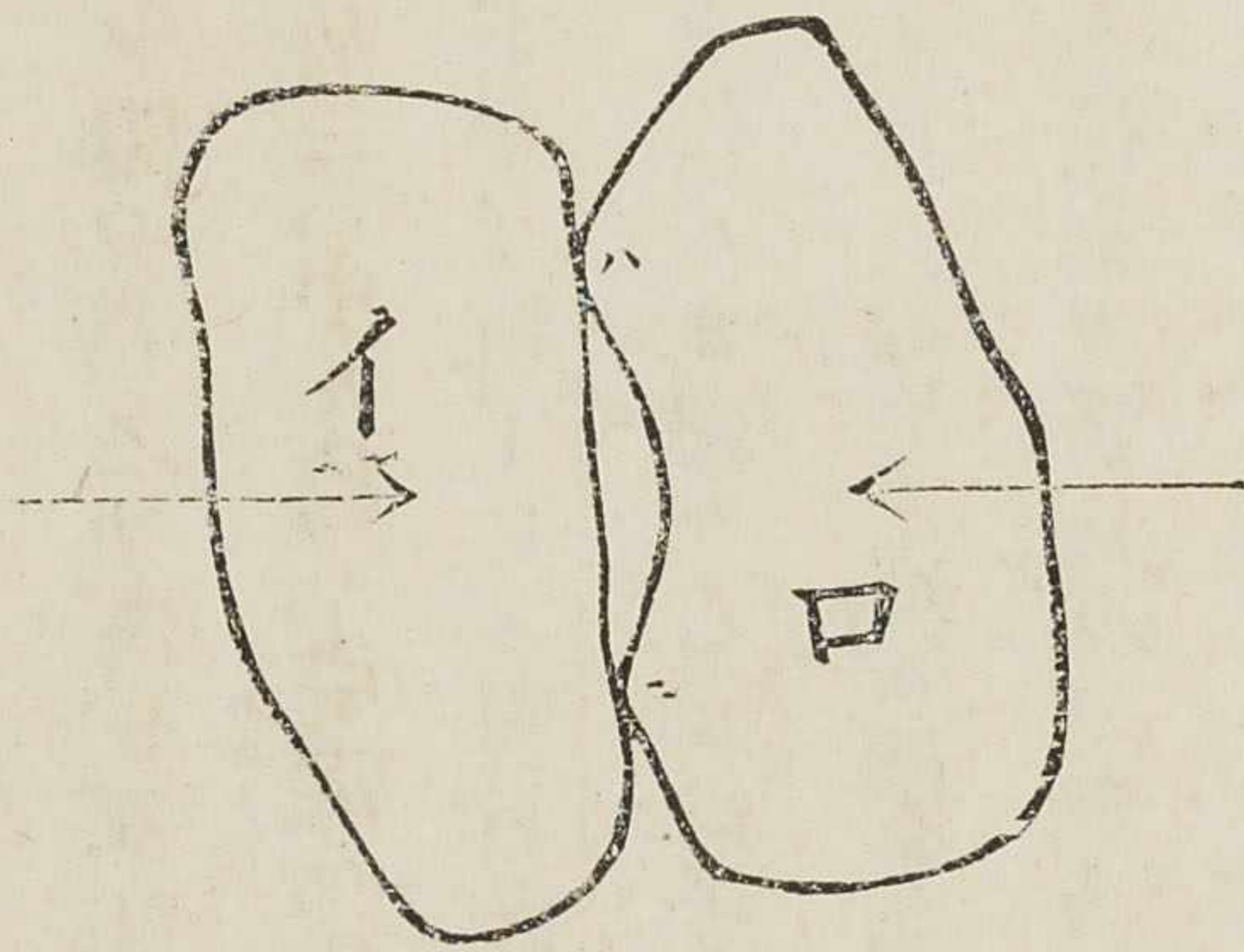


ニ水ヲ滿テ子デ  
 ニテ嚴シク水ヲ  
 壓縮シ、之ヲ寒  
 劑中ニ入ルレ  
 バ、水ハ零下二  
 十一度ノ溫度ヲ

執レモ氷結スルコトガ出來マセン、併シ其ガ本統ニ氷結シ  
 ナイカ知リ度モ子デヲ明ケテ見ル譯ニハ行キマモン、  
 何ナレバ明レバ場處ガ出來ルカラ水ハ直様氷結スルニ違  
 ナイ、其故ニムソソ氏ハ最初水ノ中ニ(ホ)ナル鉛ノ玉ヲ  
 入レ置キテ試驗シマシタ、右ノ鐵箱ガ寒劑中ニ有ル間ハ  
 鉛玉ハ箱ノ底ニ有リマス、箱ガ充分冷ヘ渡ツタ(即チ零  
 下二十一度ニ成タ)時ニ鐵箱ヲ執リ出シ、之ヲ倒ニ爲  
 シテ子デヲ抜キタルニ、鉛ト玉ハ箱ノ上部ニ有リマシタ、  
 若シ倒ニスル時既ニ氷結シテ居タナラ、鉛ガ上部ニ有

ル理ガ無イカラ、此試驗デ膨脹ガ出來ヌ時ハ、水ハ零下ノ  
 底溫度ヲ執ルモ、氷結セヌト云フコトガ疑ナク證據立テラ  
 レタルナリ

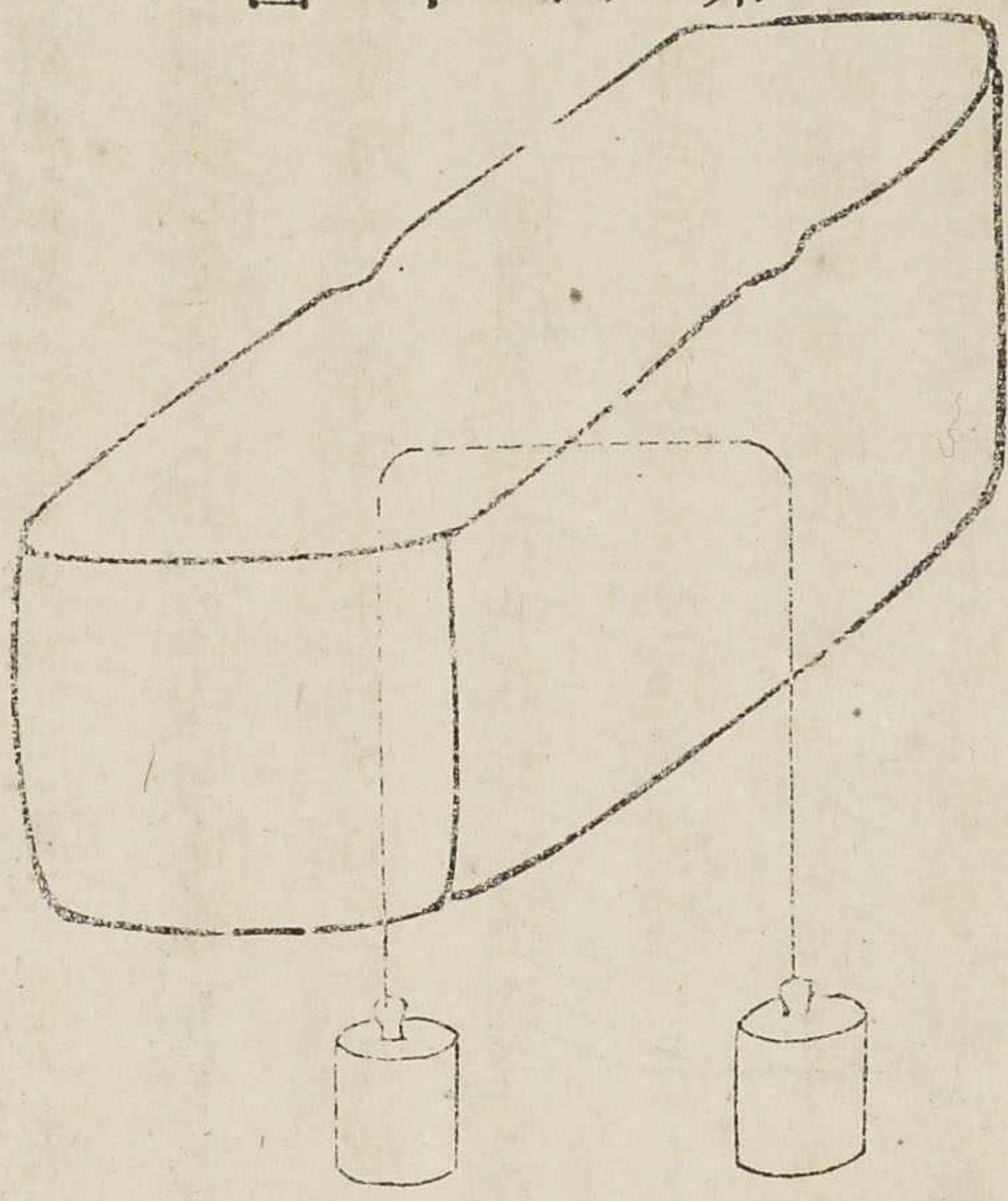
第三十九圖



水ハ膨脹スルコトガ出來ヌ時ニハ、零下著シキ溫度ニ達ス  
 ルモ氷結セヌト云フ事ヲ、言葉ヲ變ヘテ言ヘバ、水ノ凝固  
 点(或ハ氷ノ融解点)ハ壓ニ依テ變ズ、即チ壓大ナレバ凝固  
 点低クナルト云フ事ニ成リマス、茲ニ一ツ復氷ト申ス奇  
 体ナ現象ガ有リマス、第三十九圖(イ)(ロ)ナル二塊ノ氷  
 ヲ兩手ニ執リ少シ壓シマスト、固着シテ一塊ノ様ニ成テ  
 仕舞マス、二塊ヲ温湯中ニ  
 入レテ壓シテモ矢張り固着  
 シマス、此現象ニ就テハ未  
 ダ充分ニ説明ガ付カヌ様デ  
 スガ氷ノ融解点ト壓トノ關  
 係ヲ以テ可ナリ理屈ヲ付ケ  
 ルコトガ出來マス、即チ(イ)ト  
 (ロ)ガ兩方カラ壓付ケラル  
 レバ(ハ)(ニ)等ノ處ガ融解シマス、依テ生シタル水ハ零

ヨリ高<sup>タカ</sup>ラザル温度ヲ有スルカラ再タビ氷結シテ二塊ヲ固着スルナリ、併シ此説明ニテ怪シイ處ハ、壓ノ時ニ氷ガ融解スレバ潜熱ガ出テ來ル筈ナルニ、其デモ矢張再タビ氷結スルコトガ出來ルカト云フ疑問ニ有ルナリ、又二氷塊ノ固着スルニハ必スシモ壓力無クテモ出來ル事ガ有ル、其故ニパウンドレル氏ハ次ノ説明ヲ付ケマシタ氷ノ融解シ掛テ居ル塊ハ、全体ガ固体デハ無ク、既ニ多數ノ液体モ混シテ居ル、處デ、分子ノ熱運動ハ近隣ノ分子同志ガ断ヘズ交換シ合<sup>アツ</sup>テ居ルカラ、一タビ液体ト成タ分子モ固体ニ復リ、其代リニ固体ガ液体ニ復ルコトガ出來ル、其故ニ二塊ヲ

圖十四第

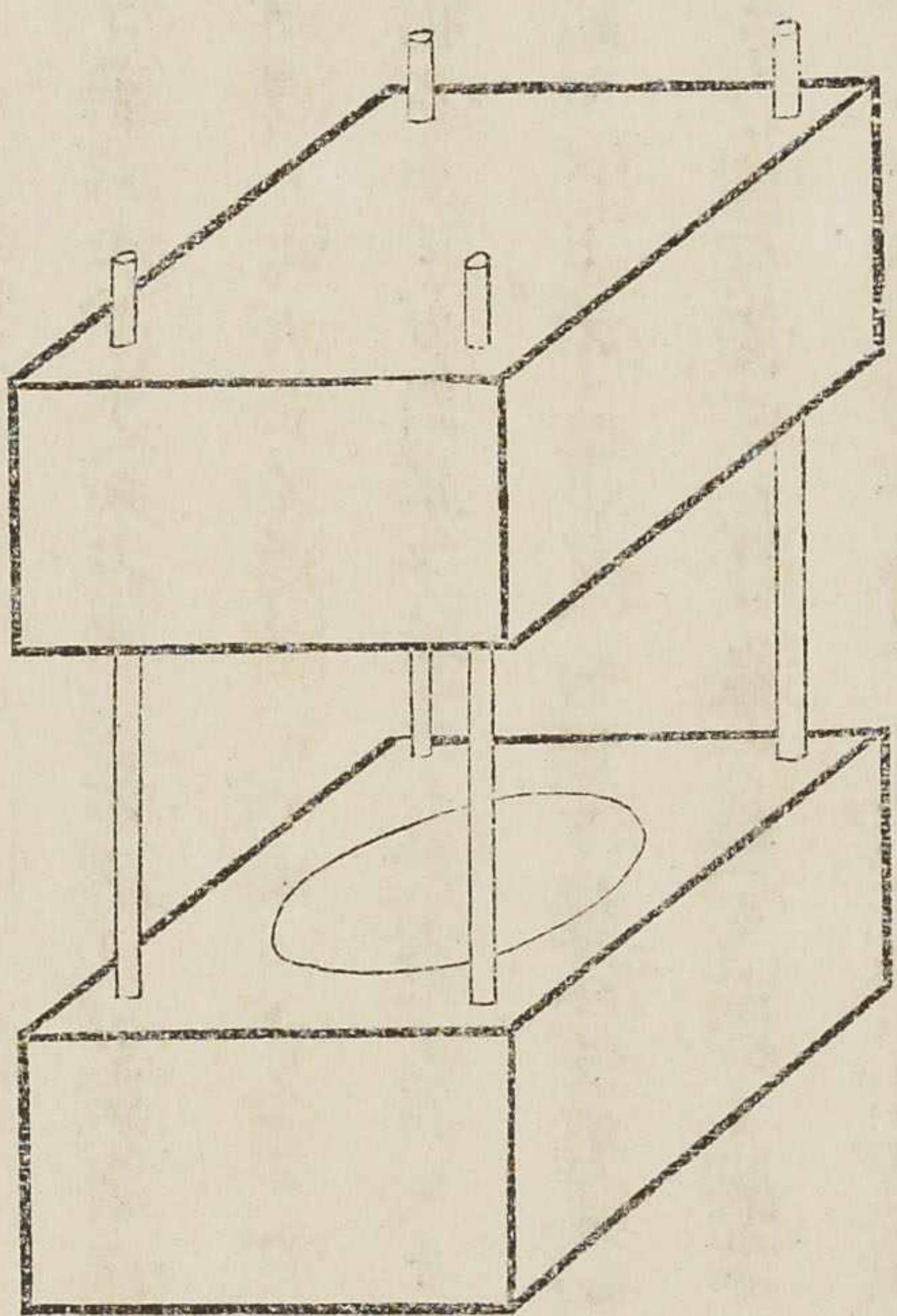


へ、其兩端<sup>リヤウハシ</sup>ニ分銅ヲ鈞下ゲテ置ケバ、張金ハ段々ニ氷ノ中

密接シテ置ケバ  
一處ニ固マルナ  
リ、此説明ハ隨  
分信ズベキ様ニ  
思ヒマス」第四  
十圖氷ノ大塊ノ  
上ニ張金ヲ横タ

ニ切り込ミマス、其切ラレタ後ハ二固ニ分レルカト云フニ、壓ノ爲メニ融解シタル液ガ復氷スル故ニ、元ノ通りノ無疵ノ氷ヲ得ルナリ、又二氷塊ヲ重子置クモ同シク一塊トナルナリ、冬ノ日<sup>ユキナガ</sup>雪投ヲスル時寒氣勵シクシテ温度ガ零ヲ下ルコト遠キハ雪ハ沙ノ如クカサ〜シテ中々固キ雪玉ヲ作ルコト難ケレト、少シ暖氣カ催シテ雪カ融解シ掛ケタルハ、透<sup>ス</sup>キ通ル様ナ固キ雪球ヲ作ルコトガ出來マス、是レハ復氷ガ爲<sup>シヤスイ</sup>易カラデス、茲ニ氷レンスヲ作ル器械ガ有リマス、第四十一圖厚キ木板二個ノ中ニ半球形ノ穴ヲ作り、下板ノ穴ニ細末ニセル氷ヲ山盛<sup>ヤマモリ</sup>ニ入レ、上板ヲ伏セテ上ヨリ嚴シク壓シ、其ヨリ上板ヲ執リ除ケテ更ニ細末

圖一十四第



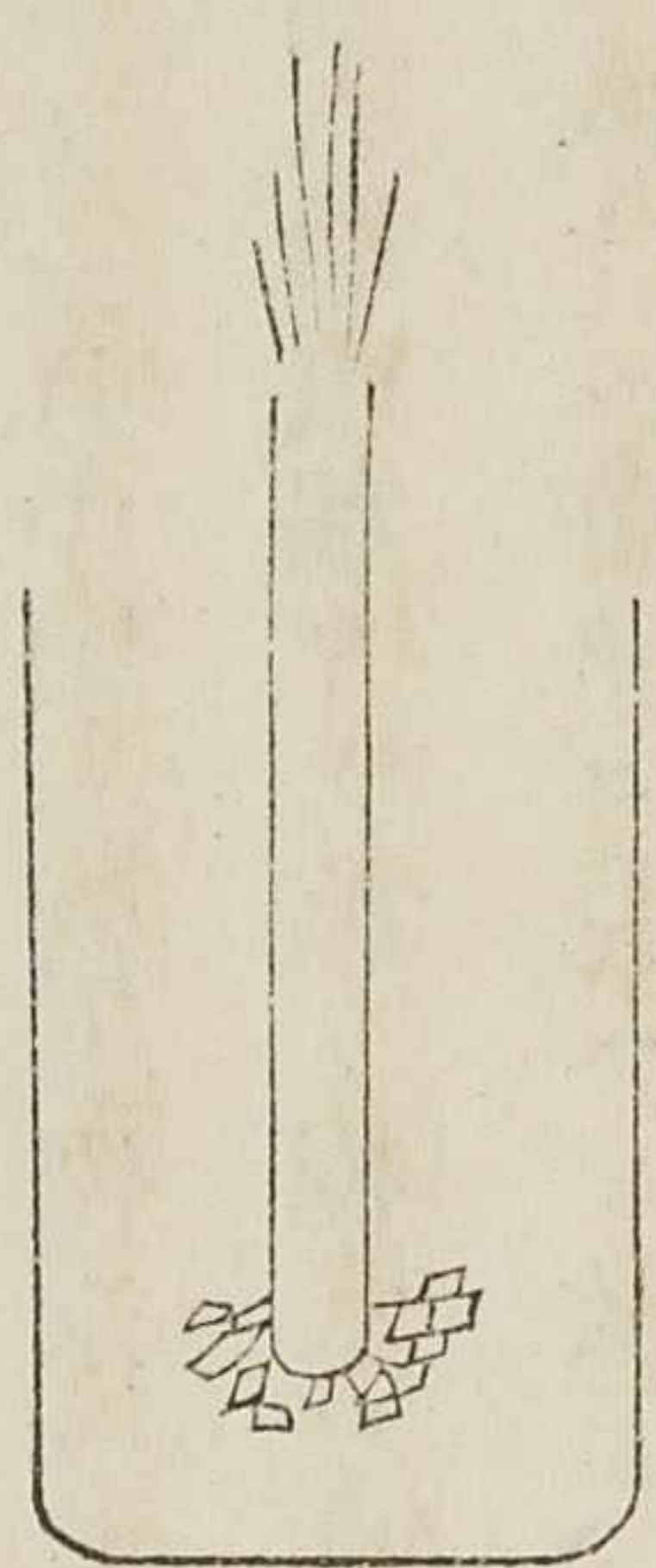
ノ氷ヲ加  
へ、右ノ  
如クニ壓<sup>ヲ</sup>  
スコト屢ス  
レバ、終  
ニ透明ナ  
ル氷レン

スヲ得ルナリ、此レンスハガラスレンスト同様ノ作用ヲ  
 持ツテ居マスカラ、之ニテ強キ光ヲ受クレバ御覽ノ通り  
 ニ光線ガ收斂サレテ焦点ガ出來マス

水ガ凝固スル時ニハ分子ガ相近ヅク故ニ、其位置ノエ子  
 ルヂーハ運動ノエ子ルヂーニ變ジ、從テ熱ガ起ル譯ナリ、  
 之ハ即チ氷ガ融解スル時ニ潜熱ト成リタル者ガ現ハレ出  
 ルナリ、併シ平常水ノ凝固スル時、別ニ熱ガ起ルノヲ、人  
 ガ見ナイノハ、全ク凝固ノ爲方ガ餘リ徐々ダカラ、目立ツ  
 程ノ温度ノ差ヲ生ゼザルニ依ルナリ

水ハ常ノ壓ニ於テハ零度ニテ凝固スル者デスガ、時ニ依  
 ルト零下隨分低キ温度ニ至テモ、猶液体トシテ存ズルコ  
 ガ有リマス、殊ニ

第四十二圖



清水ヲ少シモ運動  
 ノ無キ場所ニ置キ

之ヲ冷セバ零下五度或ハ十度迄モ凝固セヌコアリ、此現  
 象ヲ過融解ト云ヒマス、過融解ノ説明ハ未ダ確定ノ居マ  
 センカラ茲ニハ何モ申シマセン、水ニテ此試驗ヲ施スハ  
 少々六々敷アリマスカラ、茲ニ次亞硫酸曹達ヲ以テ之ヲ

示シマセウ、此物体ノ融解点ハ四十八度デス、先刻火上ニ

テ之ヲ融解シ置キマシタ、今空氣ノ温度ハ凡ソ二十度デ  
 スガ、御覽ノ通り未ダ凝固シマセン、之ヲ少シ動カスカ、

又ハ次亞硫酸曹達ノ塊一個ヲ投入スルト、急ニ全体ガ凝  
 固シマス、其凝固スル時ニハ例ノ潜熱ガ現レ出ルカラ急

ニ温度ガ高ク成ルニ相違アリマセン、私ハ之ヲ示ス爲  
 メニエーテル寒暖計ヲ用ヒマセウ、第四十二圖瓶中ニ有

ルハ過融解シタル次亞硫酸曹達ナリ、之ヲ寫繪仕掛ニ掛  
 ケ見ルニ、此液ハ何處モ透明デスガ、試験管ノ底ノ外部ニ

次亞硫酸曹達ヲ付ケ、中ニエーテルヲ入レ、之ヲ液中ニ  
 挿シ込メバ、此通りニ急ニ結晶シ、又付木ノ火ヲ管ノ上ニ

齎セバエーテルノ蒸氣ガ燃ルナリ  
 獨逸ノ北部杯ニハ滑冰ト申ス奇妙ナ現象ガ有リマス、

冬ノ朝早く起キテ、庭園又ハ街道ヲ見ルト、全面ガ極メテ  
 平滑ニ氷テ居ル事デス、是ハ通例ノ氷ガ張ルノトハ異ナ

ツテ、如何ニモ人工ヲ以テ瀬戸物ノ上ニ藥ヲ懸タ様ニ萬  
 偏ニ敷キ渡ツテ居ルナリ、此現象ハ多分水ノ過融解ニ原

因スルデ有ウト申ス事デス、即チ空中ノ水蒸氣ガ收縮シテ、

雨滴ト成ツタ物ガ、零以下ノ温度ヲ執リ居レド、過融解ノ有様ニ陥リテ氷結スル能ハザル者ガ地上ニ落ちルト、其激動ノ爲メニ急ニ氷結スルカラ、地ノ全面ガ右ノ如ク平滑ニ成ルノデス、日本ニテハ此吐ハ聞タコガ有<sup>アリ</sup>マセンガ、私ハ今年ノ一月中頃ニ當リ滑冰ラシキ現象ヲ見マシタ、其日ノ朝六時頃起キテ庭ノ樹木ヲ見タルニ、枝々數百千ノ小花カ咲ケル如クニ見ヘシ故ニ、急ニ眼鏡ヲ掛ケテ見タレバ是<sup>コ</sup>ハ如何ニ、花ト見ヘシハ磷々タル氷球ニテ、枝ノ全面ハギヤマンヲ服セタ様ニ成<sup>ナッ</sup>テ居マシタ、又其日飯田町中坂下ノ往來ハ少シ滑冰ラシキ様子ガ見ヘマシタ、尤モ是ハ他ニ原因ガ有ルカモ知レマセンガ、参考ノ爲メニ申上マス(當雜誌第五十三號四百十六葉ヲ參照セヨ)

此講義ハ最初ガ少シ委敷過キタカラ、一期中ニ全体ヲ講ジ尽スコガ出來ヌ様ニ成リマシタ、残りノ分ハ或ハ別ニ一期ヲ設ケテ講ジテモ宜シイカト思ヒマス、(畢)

養子論 (前號の續)

文科大學教授 外山 正一

養子ニ關スル其外ノ制限ト、養子ニナルノ効驗 アゼンスデハ養子ハ養家ノ人別ニハナツテモ必ズシモ姓ヲ變ヘシト云フ譯デハアリマセン、又養子ヲサレルガ爲ニ害ヲ被ル近親モアルコデスカラ、登記ハソレゾレノ手續ヲ經テ某ノ祭日 (Thargelia) ニ之ヲナスコニ成ツテ居マシタ、アゼンスデハ養子ノ權理ト義務トハ大体實子ノ權理義務ト違ヒマセンデ、養父ノ家ニ實子が出來テ、子ノ尽スベキ義務ヲ養子ニ代ツテ尽ス者ノ出來タ如キ場合デナケレバ、養子ハ之ヲ尽サナイ譯ニハ決シテ成ラナイ法デアリマシタ、又養子ニ行ツタモノハ他家ノ人ト成ツタコデスカラ、實父ニ對シテハ親子ノ中ダカラト云ツテ恩惠ヲ請求スルコガ出來マセン而已ナラズ、子ナル故ヲ以テ本來讓リ受ケベキ財産モ之ヲ讓リ受ケルコハ出來ナカツタト云ヒマス、併シ母親ニ對シテハ此様ニ權理ヲ失フコハ無カツタト云ヒマス、

羅馬ノ法律デハ實父ガ我配下ノ兒童ヲ養子トシテ他人ニ與ヘル時ニハ、實父ガ其子ニ對スルノ支配權ハ依然存シテ居マシテ、養父ニハ遷リマセナシタ、養子ハ養父ガ遺言



ナシニ死去スル様ナ場合ノ時ニ其財産ヲ相續スルノ權理  
 ハアリマシタガ、養父ノ配下トナツタ譯デハアリマセン、  
 去リ乍ラ實父ガ我子ヲ他人ノ所ヘ養子トシテ遣ラナイデ、  
 母方ノ祖父ノ所ヘ遣ルカ、又ハ其實父ハ元來放釋セラレ  
 タ身分デ、父方ノ祖父若クハ父方或ハ母方ノ祖祖父ノ所  
 へ養子トシテ其子ヲ遣シタ様ナ場合ノ時ハ、自然ノ權理ト  
 養子ニ行ツテ出來ル所ノ權理トハ、共ニ同一ノ人ニ歸ス  
 ル譯デスカラ、斯様ナ場合ニ於テハ養父ノ權理ハ自然ノ  
 緣ニ基イテ居ル上ニ、更ニ正當ニ養子ヲシタ爲ニ附イテ  
 居マシテ、少シモ減少シナイデ存シテ居マスカラ、養子  
 ハ特ニ養父ノ家ニ屬スル而已ナラズ、其配下ニ居ルモノ  
 デアリマシタ、  
 羅馬デハ婚期ニ達シナイ年齢ノモノヲ養子トスルコトヲ勅  
 命デ許ス前ニハ、ヨク穿鑿ヲ遂ゲテ、養子ニ行クハ果シテ  
 本人ノ面目ヲ害サズシテ、却テ利益トナルコトデスカ如何<sup>ドツ</sup>  
 デスカ其邊ヲ察スル爲ニ、養子ヲナスノ理由ヲ篤ト取糾  
 ス譯デアリマシタ、又養子ガ婚期ニ達シナイデ死ンダラ  
 バ、其養子ガ出來ナカツタラ相續人トナツタ様ナ人達ヘ、

養父ヲシテ其財産ヲ戻サシムル爲ニ、養父ヲシテ豫メ公  
 証人ヘ對シテ保証人ヲ立テ置カセル法デアリマシタ、  
 羅馬ノ法デハ養子ヲナスハ天然ノ順序ニ准フベキ譯デス<sup>ナツラ</sup>  
 カラ、我ヨリ年輩ナモノヲ養子トスルコトハ出來ナイ筈デ  
 アリマシタ、子ガ親ヨリ年輩ナルト云フハ不都合千萬ノ  
 コデスカラ、養父ハ養子ヨリハ十八歳年輩デナケレバナ  
 ラナイ法デアリマシタ、  
 羅馬ノ法デハ子ノナイモノガ孫若クハ孫ノ格ニ當ル養子  
 ヲナスノハ差支ノナイコトデアリマシタ、又人ノ子ヲ孫ト  
 シテモラヒ、人ノ孫ヲ子トシテモラフコトモ差支ノナイコ  
 トデ有マシタ、  
 羅馬ノ法デハ既ニ子ノ地位ニ當テ、養子ガシテアル時ヤ  
 又ハ實子ガアルノニ更ニ孫トシテ養子ヲシヤウト思フ時ニ  
 ハ、其養子ヤ其實子ノ承諾ヲ得ルコトガ必要デアリマシタ、  
 其譯ハ其實子若クハ其養子ノ意ニ戻ツテ其相續人ヲ拵ヘ  
 ル杯云フコトノナイ爲デアリマシタ、去リ乍ラ祖父ガ我子  
 ニ出來タ孫ヲ人ノ養子トシテ遣ス時ニ當テハ、其孫ノ父  
 即チ我子ノ承諾ヲ得ルニハ及バナイ定メデアリマシタ、

養子ト云フモノハ何事デモ大概正當ナ婚姻デ出來タ實子ト同様ノモノデスカラ、羅馬ノ法デハ養父ハ我ガ子トシテ貫ツタ養子ヲバ、又人ノ處ヘ養子トシテ遣ツテモ構ハナイコニナツテ居マシタ、

羅馬デハ婦人ハ實子デモ之ヲ支配スルノ權ノナイモノデシタカラ、養子ヲスルコトモ出來ナイ定メデアリマシタガ、實子ヲ失ツタモノニハ之ヲ慰メル爲ニ皇帝ハ特許デ養子ヲスルコトヲ許サル、コトガアリマシタ、

勅命デ養子ニ行クモノニ若シ子ガアル時ハ、養父ノ配下ニ移ルハ特リ其本人而已デハアリマセン、其子モ亦養父ノ孫ノ格デ其支配下ノモノトナリマシタ、

養子ハ養父ノ配下ニ居ル間ハ正當ナ實子ト全ク同シ權理ノ有ルモノデアリマスカラ、羅馬ニテハ養子ガ相續人タルト否ラザルトハ共ニ實子同様ノ規則ニヨリマシタガ、若シ養子ガ養父ニ放釋セラレタ時ハ最早子ノ中ニハ入ラナイモノデアリマシタ、又養子ガ養父ノ家ニ屬シテ居ル間ハ實父ニ對シテハ全ク他人ト看做スベキデアリマスカラ、實父ノ相續人トナルモノデハ有マセナシタ、

放釋サレタ子ハ既ニ當主ノ配下ニ居ラナイモノデスカラ、家産ノ共領者ダト云ツテ相續人トナラウト云フコトハ出來マセナシタガ、法官ハ「自然公平ノ情」ヲ酌量ノ被放釋人ト雖モ固ヨリ子孫ニハ違ヒナイカラ、他ニ相續人ノ有無ニ係ラズ、當主ノ死期ニ尙ホ其配下ニアツタモノト看做シテ、相續人ノ中ヘ入レマシタ、去リ乍ラ若シ實父ニ放釋セラレタモノガ其後外ヘ行ツテ養子トナツタ時ハ、若シ其人ガ實父ノ死期ニ當ツテ養父ノ配下ニ在ル譯ナラバ、實父ノ相續人タルコトハ出來ナイ定メデアリマシタ、併シ若シ實父ノ存生中ニ養父ヨリ放釋ヲ受ケタ時ハ、恰テウト實父カラ放釋セラレタ計リデ養家ノ人トナツタコトハナイモノ、様ニ看做シ、實父ノ財産ヲ相續スルコトノ出來ル身分ニナツテ、養父ニ對シテハ全ク他人トナリマシタ、若シ實父ノ死後ニ養父ヨリ放釋ヲ受ケタ時ハ、養父ニ對シテハ他人トナリマシタガ、サウカト云ツテ實父ヘ對シテハ子孫ノ格ヲ回復シテ相續人トナルコトハ出來ナイ定メデアリマシタ、是レハ養父ニ實父ノ財産ヲ何人ガ相續スベキカラ、左右スルノ權ガ有ルノハ不公平ダト云フ譯ダト云

ヒマス、サレバ養子ノ權理ハ實子ノ權理ヨリハ少ナイ様ニ見エマス、何ゼト云へバ實子が放釋ヲ受ケテモ、法官ノ助デ尙ホ子孫ノ格ヲ持ツテ居ルコトガ出來マスガ、養子ガ放釋ヲ受ケタ時ハ全ク之ヲ失ツテ仕舞マスカラ、右等ノ規則ハ後ニ至ツテ大イニ改正サレマシタ、其譯ハ人ノ養子トナツタガ爲ニ、實家ノ先人ニ對シテ相續權ヲ失ツタ上ニ、養父カラハ放釋ヲサレテ親子ノ縁ヲ切ラレ、ドチラノ親ノ財産ヲモ相續スルコトノ出來ナイ様ナ、ムゴキ場合ガ往々アルカラノコトデアリマシテ、即チ此様ナ弊ノナイ様ニ、他家へ養子ニ行ツテモ、實家へ對シテハ實父ノ配下ニ止マツテ居テ養子ニ行ツタコトハナイ時ト、同様ニ其權理ヲ持テ居リ、又養家ニ對シテハ養父ガ遺言ナシニ死ンダ時ニハ養父ノ財産ヲ相續スベキモノダトスル丈ノコトナリマシタ、併シ養父ノ遺言ガアル時ハ之ニ戻ツテ養子ガ養父ノ財産ヲ相續スルコトハ出來ナイ筈デアリマシタ、何ゼト申スト養父ト養子ノ間ニハ少シモ自然ノ縁ガアリマセンカラ、養父ニハ養子ヲ相續人トシナケレバナラナイ義務ガナイ故ダト云ヒマス、

羅馬デハ官吏ノ前デ主人ガ其奴隸ヲ呼ンデ「子」ト云フ時ハ其奴隸ハ自由ノ身トハナリマシタガ、其爲ニ子ニ屬スル丈ノ權理ヲ得タ譯デハナイト云ヒマス、印度デ養子トナルノ効驗ハ左ノ如クデ有マス、「クリチマ」養子デハ父ヲ換ヘルコトガアリマセンカラ、實家ニ對シテ權理ヲ失フコトハ少シモ無クツテ、養家へ對シテハ葬儀ヲ營ムノ義務ニ對シテ數個ノ權理ヲ得ルト云ヒマス、其地位ハ恰テウドジュスチニヤン時代ニ羅馬デ他人ノ養子トナツタモノト同ジダト云ヒマス、一説ニ據レバ此類ノ養子ハ養父ニ對シテ葬儀ヲ營ムノ義務ハ盡シマスガ、實家ニ對シテ葬儀ヲ營ムノ義務モ尙ホ存スルト云ヒマス、又此類ノ養子ハ特ニ養父ト養子トノ間丈ニ縁ヲ付ケルモノデスカラ、養父ノ妻ガ養父ト共ニ之ヲ養子トシナイ以上ハ、養父ノ妻ノ財産ハ之ヲ相續ハシマセン、是レニ反シテ「ダツタカ」養子デハ實家トノ縁ハ全ク絶エルコトデアリマス、併シ近キ親戚デ結婚スルコトノ出來ナイ様ナモノト結婚シテナラナイノハ養子ニ行カナイ前ト同様デアリマス、マヌー氏ノ本文ニ據レバ遣ツタ悴ハ其實

父ノ家ト所領トヲ請求スルコトハ決シテ出來マセン、葬儀ハ家ト所領トニ屬スルモノデスガ、悴ヲ遣ツタ人ニハ葬儀ハナイト云ヒマス、

養子が養父養祖父等ノ如キ宗親ホンスダノシンセキ、財産ヲ相續シテヨイ

コトハ實子ト少シモ違ヒハアリマセンガ、養父ノ兄弟從弟

等ノ様ナ支親エダハノシンセキノ財産ヲモ相續ノ出來ルモノダカ如何ダ

カト云フ問題ハ久シク決定ノ出來ナカツタモノデ有マシ

タガ、終ニ宗親ホンスダノシンセキ及ビ支親エダハノシンセキノ財産ヲ相續スルコトガ出

來ルモノト定マリマシタ、

去リ乍ラ前ニモ云ツタ通り「クリチマ」養子ノ縁ハ特ニ契

約ヲシタ本人達ノ間ニノミ出來ルモノデスカラ「クリチ

マ」養子エダハノシンセキハ支親ノ財産ハ相續スルコトハ出來マセン、

「ダツタカ」養子ニ至リマシテハ養母ノ祖先ハ即チ養子ノ

母方ノ祖先デスカラ、眞實ノ正當ナル子ニ當ルモノダト

云ヒマスガ、一説ニ據レバ「ダツタカ」養子ト雖モ其養父

母ニ對スルノ外ハ子デハアリマセンカラ、若シ養父ニ一

人以上ノ妻ガアル時ハ甲ノ妻ノ養子トナツタモノハ乙ノ

妻ノ相續人デハアリマセン、

一説ニ據レバ養子ハ實子ノ持ツ諸ノ權理ヲ持ツベキ筈デスカラ、養父ノ財産ヲ相續スル而已ナラズ、養母ニ女子ノナイ時ハ本來女子ガ相續スベキモノヲ養子ガ(養母ノ「ス

トリツド」ハ「ヲ」相續スベキハ實ノ男子ヲトコノコ同様ダト云ヒマ

ス、又一説ニ據レバ養子ハ養家ノ血縁ノモノ、財産ヲ續グノ

權理ハアリマセン、例ヘバ父ノ財産ヲ讓リ受ケタ婦人が

夫ノ承諾ヲ得テ養子ヲナシマシタ時ハ、其養子ハ其養母

ノ死ンダ時ニ其財産ヲ續グノ權理ハアリマセン、其財産

ハ他ニ更ニ近キ相續人ガナケレバ、養母ノ兄弟ノ子ガ受

ケベキダト云ヒマス、其理由ハ養子ハ養父ノ家ニ入ルモ

ノデ養母ノ家ニ入ルモノデハアリマセンカラ、養母ノ「シ

ユラッド」ハ執行トリオコナヒマスガ、養母ノ父ノ「シユラッド」ハ執行トリオコナハ

ナイ譯ダカラト云ヒマス、去リ乍ラ一説ニ據レバ養母ノ親類ガ養子ノ財産ヲ相續ス

ルコトヲ得ベキハ實子同様ダト云ヒマス、

男ノ相續人ガナイ爲ニ亡夫ノ財産ヲ寡婦ガ讓リ受ケタ時

ニハ、若シ寡婦ガ養子ヲシマスレバ其財産ハ直スグ養子ノ

モノトナリマス、併シ夫ノ財産ヲ忤ガ一度續イダカラト云ツテ、其譯デ若將來寡婦ガ其財産ヲ所有スルノ場合ガアツタ時ニ養子ヲシテハナラナイト云フコハアリマセ

ン、去リ乍ラ寡婦ノ死後ニ本來其財産ヲ讓受ケベキ様ナ人ノアル時ニ、其人ノ利害ヲ構ハズニ寡婦ガ養子ヲスルコハ出來ナイ筈デアリマス、

或ル判決ニ據レバ不身持ダカラト云ツテ養子ヲ相續人トナサナイコハ出來マセン、又或ル判決デハ死ンダ養父ノ寡婦ニ不從順ダカラト云ツテ養子ノ相續權ヲ奪フコモ出來マセン、

或ル判決ニ據レバ他家へ養子ニ行ツテモ、其養子ニ行ツタコガ何カノ理由デ無効ノモノトナツタ時ハ、本人ノ自然ノ權理ハ依然存シテ居ル譯デアリマス、サレバ此様ナ場合ニ於テハ養子ハ養父ニ對シテ扶持ヲ請求スルコハ出來ナイ筈デス、

ハシマセナシダガ、印度ノ法ハ是ニ反シテ大概ハ實子同様ノ權理ヲ養子ニ持タセマスガ、財産分配并ニ其外ノ或ル場合ニ於テハ、養子ハ實子ニ劣ルモノトシマス、ベナ

レス派ノ法律家ノ說デハ、四分ノ三ヲ實子ガ受ケテ僅ニ四分ノ一ヲ養子ガ受クベキモノトシマス、一說ニ據レバ養子ハ僅ニ五分ノ一ヲ受クベキモノトモシマス、ベンゴトルデハ養子ハ實子ニ對シテハ三分ノ一ヲ受クベキデスガ、其他ノ相續人トハ同一ノ分前ヲ受クベキコトシマス、

日耳曼デ養子ヲナスノ効驗ハ左ノ如クデアリマス、  
 (第一) 男子ガ養子ヲナスノ場合ニ於テハ、特リ其養子ニ對シテ父タルノ權ヲ得マスノミナラズ、養子ノ子孫ニ對シテモ此權理ヲ得マス、

(第二) 養子ハ實子ノ持ツベキ一切ノ權理ヲ得ルコニテ相續權モ其中ニ入ツテ居マス、又養父ノ家名ヲ取りマス、然レ日耳曼デハ實家ノ家名モ付ケテ置イテ其外ニ養家ノ家名ヲモ付ケルコデアリマス、男子ガ養子ヲナスノ場合ニ於テハ、其養子タルモノハ養父ノ父方ノ親屬ト關係ガ出來テ、實父ノ父方ノ親戚トハ悉ク關係ガ絶エテ仕舞マ

ス、併シ同父母血統ノ關係ハ少シモ變ラズ存シテ居マス、此養子法ハ貴族タルコト並ニ其領地家産ノ相續ニ關シテハ少シモ効驗ハナイサウデアリマス、是レハ畢竟貴族ガ其親戚ニ羅馬法ノ影響ノ及バナイコトヲ願フダ故ト云ヒマス、

(第二) 養子ハ素ト永久續クベキモノデアリマスガ、養父ハ放釋ヲシテ其關係ヲ解ク時ニハ、他ノ場合ニ於テ父權ヲ解クヲ得ベキト同一ノ條件ニテ之ヲ解クコトガ出來マス、然レモ「アドロゲイション」(他人ノ配下ニ居ラヌモノヲ養子トスルコト)ノ場合ニ於テハ、若シ養父タルモノガ當然ノ理由ナシニ擅ニ養子ヲ放釋シ、其相續權ヲ奪フ時ハ養父ハ特ニ養子ガ携ヘテ來タ一切ノ財産及ビ其後養子ガ自ラ得タル財産ヲ悉ク渡サナクテハナリマセン而已ナラズ、其上ニ養父ガ自分ノ財産ノ四分ノ一ヲ割イテ讓ラナケレバナリマセン、又一人ノ祖先ガアツテ其實子若クハ其他ノ後胤ヲ養子ニヤリマス時ニ、其養父モ亦其養子ノ祖先ノ一人デアアル様ナ時ニハ、十分ナ養子ノ効驗ガアリマスガ、養子ガ養子祖先ノ一人デナイ時ハ、養子ハ遺言

ナシニ養父ガ死スル様ナ場合ニ於テノミ之ニ嗣グノ權ガアリマス、

日耳曼ノ養子法ハ羅馬ノ養子法ニ據ツタモノデアリマス併シ日耳曼諸邦ノ法ニハ多小異同ガアリマス、普魯斯ノ法デハ丁年以上ノ養子ニハ已ノ財産ヲ管理スルヲ許シマス、墺地利ノ法デモサウデアリマス、且ツ此二國ノ法デハ養父ノ年齢ガ少クモ五十歳デナケレバ、養子ハ出來又定メデアリマス、養子ノ年齢ニ關シテハ普魯斯ノ法デハ單ニ養父ヨリ年少デナケレバナラヌト定メデアリマスガ、墺地利ノ法典ニテハ養父ヨリ十八年々少デナケレバナリマセン、

佛蘭西ノ養子法ハ民法ノ第一卷第八章ニ載テ居マスガ、其大略ハ左ノ如クデアリマス、

養子ヲナスハ唯々五十歳以上ノ人デ實子其他正出ノ子孫ガナクツテ、且ツ養子ヨリハ少クモ十五歳長ズルモノ而已ニ許スコデアリマス、又幼少ノ時少クモ六年間絶エズ養父ノ世話ニナツタ様ナモノカ、左モナクハ戰爭火災溺水ノ時養父ノ命ヲ救ツタ様ナモノ而已ヲ養子ニナスベキ

デアリマス、乙種ノ場合ニ於テハ養父ハ養子ヨリ年長デ、且ツ丁年即チ二十一年ニ達シタモノデナケレバナラナイト云フヨリ外ニ雙方ノ年齢ニ關スル制限ハアリマセン、若シ此場合ニ於テ養父ニ配偶ガアリマスナラ、其妻ノ承諾モナケレバナリマセン、孰レノ場合ニ於テモ養子トナルモノハ年齢二十一歳以上デナケレバナリマセン、名ノコトニ至ツテハ、佛蘭西デハ、養子ハ自分ノ名ニ加ヘテ養父ノ名ヲ付ケル譯デアリマス、又佛蘭西ニテハ養親ト養子若クハ其養子ノ子孫トノ間、或ハ一人ノ養父ノ二名ノ養子ノ間、或ハ養子ト養父ガ其後ニ擧ゲタ實子トノ間、或ハ一方ト他方ノ妻トノ間ニ婚姻ハ出来ナイコデアリマス、又養子ハ養父ノ諸親族ノ財産ヲ相續スル權理ハアリマセンガ、養父ノ財産ニ關シテハ假令ヒ其養子ヲナシタル後、實子が出来テモ養子ハ其子ト毫モ異ナラナイ權理ガアルト云ヒマス、其他佛國ノ裁判所ハ外國人ヲ養子トスルコトハ出来ナイト判決シタト云ヒマス、アラビヤ人ハ養子ト實子ト全ク異同ノナイモノト看做シタ様デアリマス、マホメットハ養子ノザイドト云フモノノ

妻ノザイナブト婚姻シマシタガ、マホメットガ自ラ立テ、「コラン」ニ歴然掲ゲテアル法ニ據リマスレバ、子ノ妻デアツタ女ト婚姻スルハ亂倫ダトシテアリマス故ニ、特別ノ神託ガアリマシテ、「イスラム」宗ニ於テハ養子ハ昔ノ様ニ實子トハ看做スベカラズト示スコガ要用デアリマシタ、「イスラム」以前ニハ全ク區別ガアリマセンデ、ドチラモ悴ト申シマシタカラ、注釋ノナイ系譜デハ放釋奴隸モ全ク純粹ノ「アラブ」人ト見エルト云ヒマス、サレバ彼ダークワンノ如キハ系譜ノ表ニハオメイヤノ悴ト載ツテ居ツテ、而カモオメイヤノ一族カラハ常ニオメイヤノ悴ト云ハレタ人デアリマシタガ、ヨク調べテ見マスト全クオメイヤノ實子デハ無クシテ、盲目ノ老人ナルオメイヤノ手ヲ引イテ常ニ歩行イタ奴隸デアツタト云ヒマス、亞米利加ノ「イロクワ」人中ニ於テモ養子ハ全ク實ノ兄弟實ノ子ノ如キ取扱ヲ受ケタト云ヒマス、養子ヲナス時ノ式 養子ヲナス時ニ行フ式ハ様々アリマス、トルコニテハ遣方ト貫ヒ方トガ治安官ノ前へ出テ雙方ノ意ヲ示シテ、之ヲ登記シテモラフ法ニテ、斯クナシタ

上ハ養父ハ養子ノ相續權ヲ剝奪スルコトハ出來ナイ由デア  
リマス、マホメットノ法デハ人ノ養子トナラウト思フモノ  
ハ、養父トナルベキ其人ノ肌着ヲ通ツテ抜ケベキ定メデ  
ス、

印度ニハ俗ノ式ト宗教上ノ式トアリマス、俗ノ式ハ國王  
ニ謹ンデ届ヲナスノト、父母ノ親戚等ヲ招クノガ大体デ  
アリマス、宗教上ノ式ハ火ニテ贄ヲシマスノト、髮剃ト、  
名付等デアリマス、去リ乍ラ宗教上ノ式ハ大切デアアリ  
マスガ、法律上必要デアアリマセン、養子ヲナス時最モ肝  
腎ナノハ子ヲ人ニ遣ル資格ノアル人ガ養父ヘ之ヲ引渡シ  
養父ガ之ヲ引取ルコトデスカラ、一説ニ據レバ他ノ式ハ兎  
モ角モ、此引渡引取サヘアレバ夫レニテ養子ハ正確ノモ  
ノダト云ヒマス、

佛蘭西ニテハ養父ノ住居スル場所ノ治安官ノ前ニ出テ、  
相互ノ承諾ヲ証定シ、然ル後養父ノ民籍ヲ管轄スル始審  
裁判所ヨリ其認可ヲ受クル法デアリマス、  
亞米利加ノ「イロクワ」人中ニテハ養子ヲナスノ式ハ族  
群ノ公會ニテナシ、式ノ性質ハ實際宗教上ノモノデアリ

マス、衆人ガ會場ヘ集ルト酋長ノ一人ガ演説ヲシテ、新入  
者ノ履歴ト之ヲ入ル、理由、養父ノ姓名、新入者ニ附ケル  
名等ヲ演ベマス、其時他ノ酋長ガ二人出テ、新入者ノ手ヲ  
取ツテ歌ヲ謠ヒ乍ラ會場ヲ彼方此方ト引廻リマス、衆人  
ハ一節ノ終毎ニ皆共ニ謠ヒマス、二人ノ酋長ハ歌ヲ謠ヒ  
終ルマデ新入者ヲ引廻ルコトデアリマスガ、其歌ヲ謠ヒ終  
ルニハ三回巡ル丈カ、ルト云ヒマス、

羅馬人ノ中ニハ養子ヲナス時ニ出産ノ眞似ヲスル式ガア  
ツタト云ヒマスガ、ギリシヤ人ノ中ニモ同様ノ式ガアツ  
タサウデ御座イマス、

或ル八種中ニテハ乳ヲ飲マセル眞似ヲスルノ式ヲナシマ  
ス、シルカシヤニテハ婦人ガ養子ヲナシマス時ニハ其養  
子ノ前ヘ乳ヲ出シテ飲マセル眞似ヲ致シタサウデ御座リ  
マス、

アビシニヤニテハ我ヨリ身分ノヨキ人ノ養子トナラント  
スルモノハ其手ヲ取り其指ヲ一本吸ツテ私ハ養子デ御座  
ルト申シマス、養子ノ式ニハ穿鑿シタラ尙ホ此外色々面  
白イノガアルコトデアリマセウ

養子ノ行ハル、理由

ギリシヤ、羅馬印度等デ養子ノ行

官吏ニ登用セラル、ト云フ法ガアツタ故ダト云ヒマス、



養子ノ行ハル、理由 ギリシヤ、羅馬、印度等デ養子ノ行ハレタノハ、葬儀ヲ營ミ祖廟ヲ祭ルノ必要ト、家督相續人ヲ要スルトノ二ツノ原因ノ爲ダト云ヒマス、ギリシヤ、羅馬ニ於テモ印度ニ於テモ養子ハ特ニ家名永續ノ爲ニシタルモノデハナク、神佛ヲ祭ルベキ人ヲ殘シ置カウト云フ爲ノモノダト云ヒマス、

マヌー氏ハ云ヒマス「人ハ男ノ子ニ依テ萬民ヲ從ヘルコガ出來、男ノ子ニ依テ不死ヲ得ルコガ出來、男ノ孫ニ依テ天國ニ至ルコガ出來ル」ト云ヒマス、古今印度社會ニ養子ノ制ノ行ハレタノハ、家名ヲ永存シヤウト云フ爲デアリマシタカ、夫レハ兎モ角モ、男ノ實子ノナキ時ニ其代人ヲ設クル爲ニ養子ヲナスハ今日ト雖モ、印度デハ尙ホ昔ノ様ニ熾ニ行ハル、ト云ヒマス、

一説ニ羅馬デ王家ニ養子ノ制ノ熾ニ行ハレタルハ王位ノ相續ヲシテ平穩ニ濟マセヤウト云フ爲ノ政治上ノ方便デアツタト云ヒマス、又前ニ云ツタ通り一時羅馬デ民間ニ熾ニ養子ヲスルコガ流行シタノハ、多クノ子ヲ有ツ者ハ

官吏ニ登用セラル、ト云フ法ガアツタ故ダト云ヒマス、未開ノ世ノ中ニハ敵ト戰ツテ復讐ヲシテ吳レル様ナモノヲ後ヘ殘スノハ極メテ必要ナコデスカラ、實子ノナイモノハ養子ヲシテ其復讐人ヲ設クル様ナコモ亦養子ノ行ハレタ原因ノ一ツダラウト云ヒマス、腕力社會デハ復讐ヲナシタリ家ヲ維持シタリスルハ男子ニ限ルコデスカラ、斯ル時代ニハ相續人ガ男子ナルハ極メテ必要ノコデアリマシタラウ、サレバメダイナノ古キ法律ニ據レバ、女子ハ財産ヲ相續スルコハ出來マセン、何ゼト云ヘバ戰爭ノ時ニ加勢ヲナシタリ、分捕ヲナシタリ、財産ヲ守護シタリスルコノ出來ナイモノハ、相續人タルコハ出來ナイカラト云ヒマス、

右等ノ原因ハ養子ノ制ヲ晚世マデ永ク行ハレサシタモノデアリマセウガ、養子ノ制ハギリシヤ、羅馬、日本等ノ如ク稍々高等ナル社會ニノミ行ハレタモノデハナク、亞米利加人ノ中ニモ行ハレ、バアラビヤ人ノ中ニモ行ハレタモノデスガ、稍々未開ナル社會ノ間ニ行ハレタ養子ノ制デ著シキモノハ前ニ云ツタ、彼アラビヤ、シーロンノ人

及「ヒブリュー」人ノ間ニ行ハレタ「ビーナ」婚姻ト云フ婚  
 養子ノ一種デアリマス、扱テ「ビーナ」婚姻ノ起原ヲ尋子マ  
 スニ、一説ニ據レバ同種屬婚姻ノ一定シタ規律ガナイ場  
 合ニ於テハ、種々ノ種屬ニ屬スル人ノ間ノ婚姻ノ模様ハ  
 様々ニテ且ツ其永續ノ度ノ如キモ一定シタコトハアリマス  
 マイガ、或ル場合ニ於テハ女子ガ我種屬ヲ去テ他ノ種屬  
 ノ中ニ我ガ生涯ヲ送ル家ヲ得ルコトガアリ、又或ル場合ニ  
 於テハ種屬ノ掟ニテ女子ニ其種屬ヲ去ルコトハ許シマセン  
 ガ、他ノ種屬ノ人ヲ夫トシテ待遇スルコトハ許スコトガアリ  
 マシテ、斯ル場合ニ於テハ男ハ永ク女ノ家ニ來テ其種屬  
 ノ者トナルカ、サウデナケレバ只々時々通ヒ來ルニ過ギ  
 ナイ向モアリマシヤウ、又或ル場合ニ於テハ婚姻ノ制ハ  
 アツテモ離別ガ實ニ繁<sup>シ</sup>キ向モアリマシヤウ、  
 扱女子ガ我ガ種屬ヲ去ルコト否ムカ又ハ去ルコトヲ許サレヌ  
 様ナ社會ガアルカト尋子マスルニ、「ベドウィーン」社會ニ  
 テハ概シテ女子ガ我ガ種屬ヲ去ルハ甚ダ稀ノコトニテ、他  
 ノ種屬ノ人ニ此方へ來テ妻ヲ得テ其種屬ノ中ニ加ハラウ  
 ト云フ者ガアレバ悦ンデ之ヲ許スト云ヒマス、ゼビドノ

女子ノ如キハ他ノ種屬ノ人ノ妻ニナルコトハ少シモ厭ヒマ  
 セナンダガ、夫ガ妻ノ種屬ヲ去ルコトガアツテモ、妻ハ決  
 シテ夫ト共ニ我ガ種屬ヲ去ルコトヲ好ミマセズ、夫ト共ニ  
 去ツタモノハナカツタト云ヒマス、アラビヤノ話ニシヤ  
 ヒリヤノ婦人ハ夫ニ暇ヲクレル權理ガ有テ、其離別ノ仕  
 方ハ若シ天幕住ノ者ナラバ天幕ヲグルリト向ケ替ヘテ置  
 クコトニテ、前ニ入口ガ東ニアツタラバ今度ハ西ノ方ニア  
 ル様ニシテ置クコトデアリマシタ、夫ハ天幕ノ斯様ニ向キ  
 替ツタノヲ見レバ、即チ離別サレタコトヲ悟ツテ、其内ニ入  
 リマセナンダト云ヒマス、サレバ天幕ハ妻ノ所有デアツ  
 テ、夫ハ婚養子ノ如キ者トナツテ其天幕ノ内ニ住ヒ、妻ノ  
 意ニ叶ツテ居ル中文止ツテ居ツタコト見エマス、或人ハ  
 アラビヤ人種中ニ、婦人ガ其種屬ヲ去ラナイ慣習ガ確固  
 ト行ハレタ証據ダトシテ此例ヲ引キマシタ、婦人ガ其種  
 屬ヲ去ツタ譯ナラバ斯ル婚姻ハ素ヨリナイ筈ダト云ヒマ  
 ス、婦人ガ天幕ヲ擔イデ沙漠ニ行ツタ杯云タコトハナイコ  
 デアリマセウ、故ニ斯ル「サラセン」人中デハ妻ト同シ種  
 屬デナイ夫ハ暫ク妻ノ種屬ニ加入シタコトデアリマセウ、

妻ガ夫ニ倉ヲ進物スルノ習慣ハ、夫ガ妻ノ家ニ止ル間ハ

種屬ヲ去ツテ妻ノ種屬ニ移ル習慣ノ行ハレタコトヲ徵スル

妻ガ夫ニ鎗ヲ進物スルノ習慣ハ、夫ガ妻ノ家ニ止ル間ハ妻ノ種屬ヲ助ケテ戦争ヲシヤウト云フコトヲ表スル爲ダト云ヒマス、又アラビヤ人中ニテハ若シ某ノ種屬ノ守護ヲ仰ガント欲スル者ハ、其種屬ノ女子ヲ得テ妻ニナシ度キ由ヲ申シ込ム習デアリマシタ、是ニテ見マスルニシロクニ尚ホ行ハル、様ナ「ビーナ」婚姻ガ「アラブ」人中ニ行ハレタコトハ疑ノナイコトダト云ヒマス、アラビヤ人シロクヤ人及ビ「ヒブリユ」人中デハ實際妻ガ夫ノ方ヘ來ル如キ場合デモ尚ホ婚入リト云ヒマスノハ、古昔是等ノ人種ノ中ニハ婚養子ガ行ハレタ證據ダト云ヒマス、又今日婚姻ノ式ニ天幕ヲ用フルノモ、其上稍々婚姻ノ法ガ定ツタ時ニ當テ、男ガ女ノ方ヘ婚入養子ニ來ルノ風俗ガ行ハレタ其風俗ノ遺物ダト云ヒマス、「ヒブリユ」人中ニハ一般ニ婚姻ノ時ニ天幕式ノ行ハル、ハ昔此人種ノ中ニハ廣ク「ビーナ」婚姻ノ習慣ガ行ハレタ證據ダト云フ說ヲ唱フル者ガアリマス、彼ノ創世記ニ「人其父母ヲ去リ其妻ニ着キ二人一体トナル」ト云フコトガアリマスガ是レハ即チ當時此人種ノ間ニハ「ビーナ」婚姻ガ行ハレテ男子ガ我が

種屬ヲ去ツテ妻ノ種屬ニ移ル習慣ノ行ハレタコトヲ徵スルニ足ルモノダト云フ說ガアリマス、又ジェーコッブハ其妻子ヲ取去ルノ權理ガナイトレイバンガ云ツタコト、アブラハムガアイサークノ爲ニ妻ヲ搜シタ時、其僕ガ蓋シアイサークハ妻ノ種屬ノ中ニ移住シロト云ハル、ダラウト思ツタコト、サムソンノ妻ガサムソンノ種屬ニ移ラズシテサムソンノ方カラ、妻ノ方ヘ行ツタコト杯ハ、皆「ヒブリユ」人中ニ「ビーナ」婚姻ノ行ハレタ證據ダト云ヒマス、扱「ヒブリユ」人種中ニ「ビーナ」婚姻ノ斯ク熾ニ行ハレタ理由ニ就テハ、或ル人ノ說ニ據レバ、同人種ハ人ノ國ヲ攻メ取リタルモノニテ常ニ敵ト白眼合ツテ居タモノデ同人種中ノ不和ハ成ル丈避ケナケレバナライ様ナ事情デスカラ、婚姻ノ法モ平穩ナルモノ、行ハル、ハ素ヨリノコデアリマシタガ、我が征伐シテ討從ヘテ下等ナ人種ダト見下シテ居ル所ノ人達ノ生捕ノ様ナ地位ニ自分達ノ娘ヲ置クコトハ好マナイコデアリマシタラウ、サレバ婚姻ノ性質ハ夫婦ヲシテ主從ノ様ナ關係ノモノナルヨリハ寧ロ親友ノ間ノ關係ノ様ナモノトシマシタラウ、買妻ノ制モ

征伐時代が過ぎタ後デナケレバ行ハレ無ツタコトデシヤウ  
サレバ太古「ヒブリュー」社會ニ「ビーナ」婚姻ノ大イニ流  
行シタノモ、天幕ヲ以テ婚姻ノ式ニ必要ナル道具ト久シ  
ク看倣シタノモ怪ムコトデハナイト云ヒマスガ、果シテ如  
何ガナモノデシヤウヤ、俄ニ彌々サウデアラウトモ云ヘ  
マスマイ、

以上ハ養子ノ制ハ特リ日本ニ而已行ハレタ者デハ御坐イ  
マセズノ、古今外國ニモ多ク行ハレマシタモノニテ、未開  
人ノ中ニハ少シモ珍敷ク御坐イマセンコトヲ證明スル爲ニ  
聊カ述ベマシタモノデ御坐イマスガ、果シテ其證據ニナ  
リマスカドウデスカ存ジマセンガ、若シ其證據ニナリマ  
ス譯デ御坐イマスナラバ誠ニ悦バシイコトデ御坐イマス、

○ (完)

化學ノ變化 (前号ノ續キ)

第一高等中學校教諭 久原躬弦演說

前ニ余ハ分解反應ニ在テハ、熱ノ吸收アルコトヲ説明シタ  
リ、然ル處合成反應ニ於テハ之ニ反對シテ熱ノ發生アリ、  
此事ハ既ニ余ガ施行シタル、合成反應ノ四試験ニテ明カ

ナリ、故ニ化學ノ變化ニハ、必ズ熱的結果アルモノナリ、  
此事柄ハ化學上ニ在テハ、甚ダ肝要ナルコトニテ、甲原子  
ガ、乙原子ト結合シテ、丙分子ヲ造クルルハ、イツモ、同量  
ノ熱ヲ發シ、丙分子ガ甲原子ト乙原子ニ、分離スルニハ、  
亦イツモ、同量ノ熱ヲ吸收ス、依テ化學ノ變化ハ、主ニ分  
解、合成ニ反應ヨリ成ルモノナレバ、熱的結果ハ、差引キ  
勘定ナルコト、是レ一般ナリ

爰ニ熱的結果ノ、非常ニ著シキ例アリ、此「シリンドル」中  
ニ、アルモノハ、尋常ノ空氣ニシテ、其五分一ハ酸素ノ分  
子、其五分ノ四ハ、窒素ノ分子ナリ、今「シリンドル」中ニ、  
燐ノ一片ヲ燃燒ヒニテ、入レ之ヲ熱シタル線金ノ尖キニ  
テ、觸ルレバ、忽チ光輝ヲ放テ燃ユ、即チ燐ガ空氣ノ酸素  
ト、化合スルニアリ、筒様ニ、諸君ノ見ラレタル通り、余ガ  
温キ線金ヲ、燐ニ觸レシメタルハ、余ガ燐ヲ少シク熱シタ  
ルニ在リ、燐ハ只ダ空氣中ニ、入レタルバカリニテハ、直  
ニ燃ヘズ、如何トナレバ、燐ガ酸素ト化合スルニハ、極マ  
リタル温度ニマデ、達セザルベカラズ、此レハ、燐ニ限ラ  
ズ、如何ナルモノデモ、必ズ極マリタル温度マデ、達セザ

レバ、決シテ燃ユルコトナシ、此燃燒スル温度ヲ、我々が發火点或ハ發火温度ト稱シ、諸燃性物、皆ナ其發火点ヲ異ニス、譬へバ燐ノ如キハ、沸湯ノ温度ヨリモ、稍々低キ温度ニ達スレバ、燃燒スルモ、硫黄ハ燐ヨリモ、遙ニ高ク熱セザレバ、燃燒セズ、又炭素ノ如キハ、硫黄ヨリハ、尙ホ高度ニ、達セザレバ、燃燒スルコトナシ

燐ガ空氣中ニ、於テ燃ユルハ、燐ノ原子ガ、非常ノ勢ヲ以テ、酸素ノ原子ヲ引クニ係ル、ソコデ、燐ノ燃へ始メル前ニ、余ガ燐ヲ熱シテ、其温度ヲ高メタリ、筒様ニ、温度ノ高マルト云フコトハ、近時ノ理論ニ依レバ、分子ノ運動ノ速力ノ増スト云フ義ニテ、燐ノ原子ト酸素ノ原子ガ、互ニ化合スルニハ、燐ト酸素ノ分子ガ、互ニ相近寄ラザルベカラズ、而シテ分子ガ、互ニ相近ヅクニハ、其運動ノ速力ガ、若干度マデ達セザルベカラズ、依テ丁度双方ノ原子ガ、結合スルコトノ、出來ルホド分子ガ相近付クニ肝要ナル運動力ニ達シタル時ノ、温度ガ即チ發火点ナリ

燐ノ燃ユルハ、合成反應ニシテ、燐ノ二原子ト酸素ノ五原子トガ、化合シテ白色ノ五酸燐ノ一分子ヲ生ズルニアリ、

燐ノ原子ガ酸素ノ原子ト化合スルニ、非常ニ多量ノ熱ヲ發シタリ、之ヲ語ヲ變テ云へバ双方ノ原子ガ結合スルニ「エ子ルヂー」ノ多量ヲ、熱ト光ノ形ニテ發現セシメタリ、凡ソ物ノ燃ユルニ當テ、其發スル熱量ハ、燃性物ノ量ニ係リ、決シテ燃燒ノ遲速ナドニ、係ルモノニアラズ、例へバ燐ノ一匁ヲ燃セバ、イツデモ、其發スル熱量、同一ナリ、縱令ヒ燃燒ヲ烈シクスルトモ、熱量ハ増加セズ又之ヲ遲緩ナラシムルモ、減ズルコトナシ

見ヨ爰ニ「シリンドル」アリ、其中ニ酸素ヲ入レ置ク、其容積モ其太サモ、前ノ試験ニ空氣ヲ入レテ、其中ニ、燐ヲ燃ヤシタルモノト、同一ナリ、此酸素中ニ於テ、余ガ前ニ空氣中デ燃ヤシタルト、同量ノ燐ヲ、前ト同様ノ手續キヲ以テ、燃スベシ

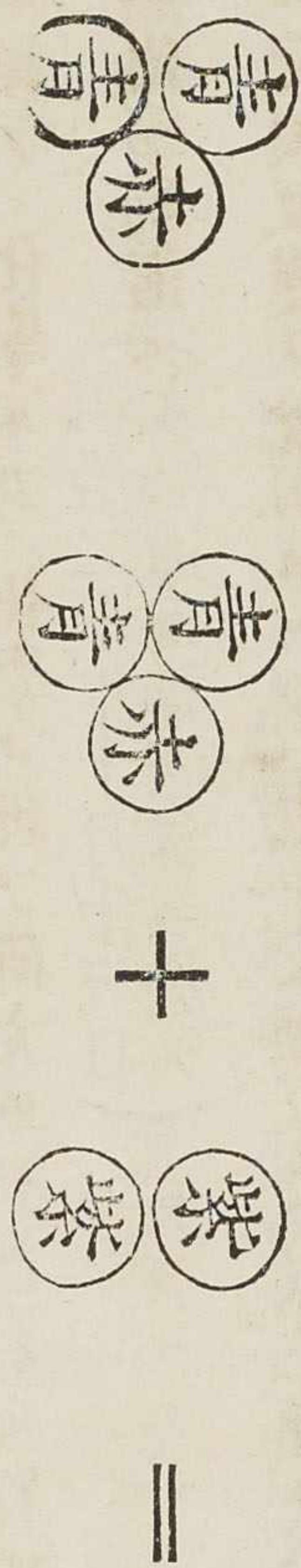
夫レ酸素中ニ在テハ、燐ハ空氣中ニ於ケルヨリモ、一層烈シキ熱ト光ヲ放テ燃ユ、此レハ如何ナル故カト申セバ、酸素ヲ入レタル「シリンドル」中ニハ、空氣ヲ入レタル「シリンドル」ニ、比スレバ、五倍多キ、酸素ノ分子ヲ含ムガ故ニ、燐ハ空氣ノ中ニ在ルヨリモ、カ倍多量ノ酸素ノ分子

ト、一度ニ相觸ル、ヲ以テ、此五倍多量ノ分子中ノ原子ガ、  
 磷ト一度ニ化合ス、然ルニ空氣中ニ在テハ只ダ五分一ノ  
 分子中ノ原子ト、一度ニ化合スレバナリ、依テ同量ノ磷ガ  
 空氣中ニ在テ燃ユルモ、酸素中ニ燃ユルモ、其發スル熱  
 量ハ、毫モ異ナルヲナシト雖モ、磷ハ酸素中ニ於テ燃ユル  
 ニハ、只ダ時間ノ五分一ヲ要スルガ故ニ、發スル熱量  
 ガ、只ダ一度ニ、集マル譯ナレバ、從テ温度ガ高く、且ツ一  
 層烈シキ、光ヲ放ツ所以ナリ  
 夫故ニ定量ノ一物ガ、定量ノ他物ト化合スルハ、イツモ、  
 同量ノ熱ヲ發ス、原子ハ各種皆ナ定重量ヲ有スルガ故ニ、  
 一物ノ原子ガ他物ノ原子ト結合スルニハ、常ニ同量ノ熱  
 ヲ發シ、又之ニ反對ノ反應ヲ申セバ、一物ノ分子ガ原子ニ  
 分離スルハ、イツモ、同量ノ熱ヲ吸収ス、箇様ニ、化學的  
 變化ト熱的現象トノ間ニ、深キ關係アルガ故ニ、此熱的現  
 象ニ賴テ、化學家ガ、化學ノ理ヲ研究スルモノヲ、名ヅケ  
 テ熱化學ト稱ス  
 次ニ交換反應ヲ説明スベシ、夫レ交換反應ハ、二種ノ分子  
 間ニ於テ、分子全体ノ構造ヲ變ズルコナク、原子或ハ復合

原子ヲ、相互ニ交換スルコヲ以テ成立ツ、交換反應ト申  
 モ、矢張り二種ノ分子、一度分離シ、後チ新ニ分子ヲ造ル  
 コニテ分解、合成ニ反應ガ成ル者ナレモ、此反應ハ化學上  
 ニ、最モ屢々相起ル者ニシテ、其結果ヨリ見レバ、只分子中原  
 子ノ交換ニ止ルガ如シ、故ニ格別ニ之ヲ爰ニ論ズル也」  
 交換反應第一ノ例ハ、水ニ「カリウム」ノ動作ヲ以テ、水素  
 ヲ製スルノ法是レナリ、今水中ニ「カリウム」ヲ投ズレバ、  
 紫色ノ火焰ヲ放テ、燃ユルモノアリ、此レハ「カリウム」ノ動  
 作ニ因テ、水ヨリ遊離シタル水素ガ、反應ノ爲ニ、發シタ  
 ル熱ニテ、燃ユルニアリ、其紫色ハ熱ノ爲メニ、揮發シ  
 タル「カリウム」ニ因ル、而シテ「カリウム」ノ消失シタル  
 後、其水ヲ試験スルニ、全ク尋常ノ水トハ、其性ヲ異ニス、  
 即チ赤色「ラクムス」ヲ青色ニ變化シ、又「アルカリ」性ノ  
 味ヲ帶ブ、之ヲ蒸發スレバ、白色ノ固体ヲ得ル、此モノハ、  
 化學家ガ苛性「カリ」ト稱スル物体ニシテ、其一分子ハ「カリ  
 ユム」ノ一原子、水素ノ一原子及ビ酸素ノ一原子ヨリ成  
 モノナリ、又化學家ハ、種々ノ方法ヲ以テ、水ノ二分子ニ、  
 「カリウム」ノ二原子ガ、働クハ、丁度水素ノ一分子ヲ、放

散スルノ割合ナルコヲ知ル、故ニ其反應ハ左ノ如シ、  
 子、相互ニ其位置ヲ交換シテ、新ニ鹽化「カリウム」ト沃度水

散スルノ割合ナルコトヲ知ル、故ニ其反應ハ左ノ如シ、



水ノ分子

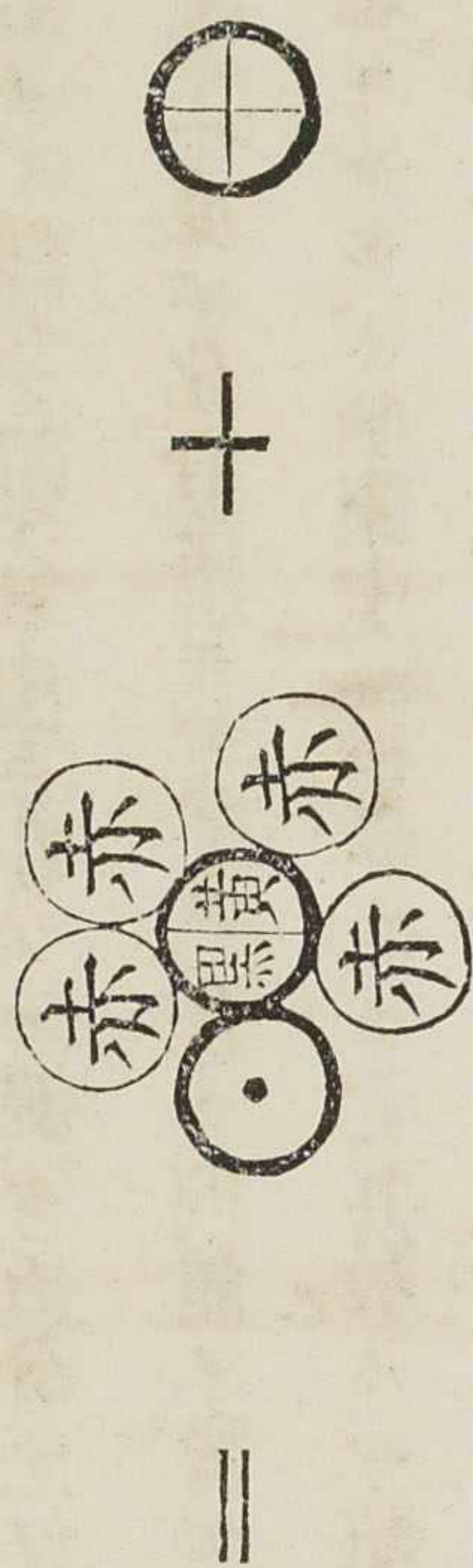
「カリウム」ノ分子

此ノ方程式ハ「カリウム」ノ二原子ガ、水ノ二分子中水素ノ二原子ト、其ノ位置ヲ交換シタルコトヲ示ス、之レヲ云ヒ變ヘレバ、新分子ハ、舊分子ト同形ノ構造ヲ有スレトモ、水素ト「カリウム」ノ原子ガ其ノ位置ヲ異ニシタルコトヲ示ス

交換反應第二ノ例ハ、沃度「カリウム」液ト鹽化水銀液トヲ混交シ、赤色ノ沃度水銀ヲ沈澱セシムルニアリ、即チ沃度「カリウム」液ト、鹽化水銀液ヲ混ズレバ、兩分子中ノ原

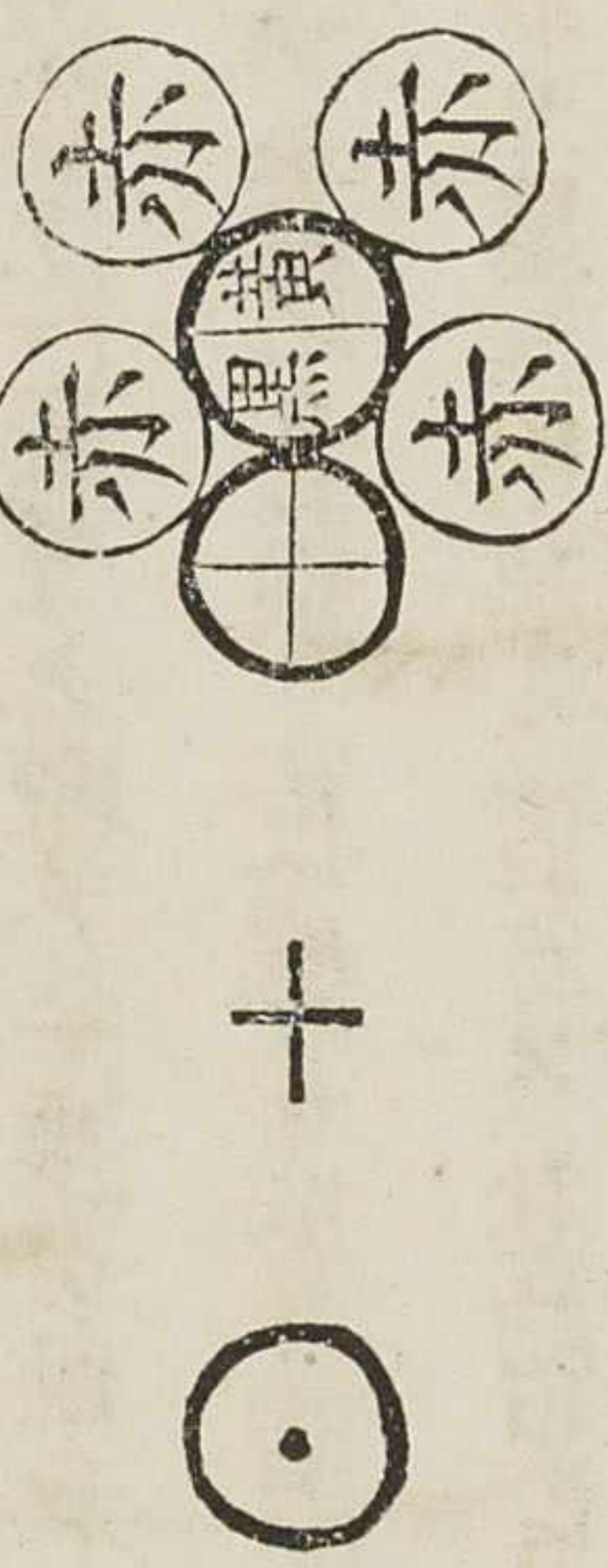
鐵ノ原子

硫酸銅ノ分子



硫酸鐵ノ分子

銅ノ原子



子、相互ニ其位置ヲ交換シテ、新ニ鹽化「カリウム」ト沃度水



苛性「カリ」ノ分子

水素ノ分子

銀ノ分子ヲ造ル、然ル處、鹽化「カリウム」ハ水ニ長ク溶解スレトモ、沃度水銀ハ溶解セザルヲ以テ沈澱ス、此レ交換反應ヲ示スモノナリ

交換反應第三例ハ、硫酸銅液ニ、磨キタル鐵刃ヲ挿入シテ、之ヲ銅ニテ被ハシムルニアリ、見ヨ硫酸銅液ニ長ク尖リタル「ナイフ」ヲ入レルト、全ク其面ヲ銅ニテ被フ、此レハ、左ノ方程式ニ於ケルガ如ク銅ト鐵ガ、其位置ヲ交換スルニアリ

箇様ニ前ニ述タベル通り、化學變化ハ、三種ノ反應ヨリ成立ツトハ云フモノ、論シ詰メテ申セバ、分解、合成ノ二反應ニ外ナラズ、即チ分子ノ原子ニ分離スルコト、原子ガ新ニ分子ヲ造クルコト是レナリ、ソコデ、前ニモ云ヘルガ如ク、分子ガ原子ニ分離スルキハ、熱ヲ吸収シ、原子ガ互ニ結合シテ分子ヲ造クルキハ、熱ヲ發ス、而シテ熱ハ彼「エ子ルヂー」ノ一形ニシテ、他ノ「エ子ルヂー」ノ變形ナリ、故ニ化學上ニ、働ク處ノ物質即チ原子ハ、互ニ結合スルキ、熱ニ變化スル處ノ、一種ノ「エ子ルヂー」ヲ有セザルベカラズ、又分子ガ、原子ニ分解スルキハ、熱ヲ吸収スルガ故ニ、熱ヲ變ジテ右ノ一種ノ「エ子ルヂー」トシテ保存セ子バナラヌ、此一種ノ「エ子ルヂー」ヲ、化學ノ「エ子ルヂー」ト稱ス、故ニ化學ノ變化ハ極々云ヒ詰メレバ、物質ノ形ノ變化ト、「エ子ルヂー」ノ形ノ變化ヨリ成ル者ナリ(完)

○  
海ノ世界  
(明治二十年十月十五日  
大學通俗講談會ニ於テ)

第一高等中學校教諭

松原新之助講談

雨森兼太郎筆記

此演說ハ元ト幻燈説明ニ係ル者ナルヲ以テ書中往々圖画ノ如何ヲ說ク所アリ然レモ本紙ハ今別ニ圖画ヲ挿セス看者之ヲ諒セヨ

ズツト見渡シマスレバ限リモ知レヌ海原ニ視力ノ及ブ處ハ唯々ポットト大キナ穹形ヲ畫キ何ニモ眼ニ障ル者ハナク此中ニ日ヤ月ガ昇リ降リヲナスノミデ又時ニヨリテハ百千ノ大山ガ崩レカ、ルガ如ク萬億ノ雷電ガ落來ルガ如ク荒濤ノ打上ゲ打ヲロス勢ハ中々口ニモ言ヘヌ恐ロシキコデアリマス是ハ即チ海面ヲ見タ處ノ有様デアリマスナント海ト云フ者ハ廣大無邊ノ者デハゴザラヌカ

此廣大無邊ノ海ハ我々が地球表面ノ過半ヲ占メ其中カラ產出スル物ハ又數ノ限モ知レヌ程デ此生物ニハ要用ノモノモ少カラズ我々ニ取リテハ無クテ叶ハヌ物モ隨分大層アリマス如レ此海ト我々トハ深キ關係ガアルニヨツテ海中ノコトモ千萬詳カニ承知セ子バ成ラヌ次第ナルニ此海ハ我々が氣中ノ世界トハ唯々一ツノ水平線ヲ限リトシテ全ク其境ヲ分チ容易ニ此海世界ノ有様ヲ探リ其世界ノ生物ガドンナ生活ノ有様デアルカヲ明カニ知ルコトノ出來ヌ

ハ遠分淺念ナリコトデアリマセンカ

コトノ出來ヌハ知レタコデアルカラ是レモ亦タ諸君ノ御免



ハ隨分残念ナコデハアリマセンカ

然シナガラ人間ハ無量ノ知識ガアルカラ此知識ヲ發揮シテ探索シタランニハ知ルコノ出來ヌトモ限りマスマイ夫ノ海底船ニ乘リテ海中ヲ旅行シタトカ云フコトモアリマズガ是レハ小説ノ記スル處ニシテ尽ク實事トハ致サレマセズ唯ダ想像丈ケノコトデアリマス然ラバ至妙ノ潜水器ヲ作りテ一々海底ヲ探ラウカト思ヒマシテモ是レモ中々容易ニ出來ルコトデアリマセン然ルニ私ガ今晚此ニ海ノ世界ト題シテ其荒方ヲ述ベント存ズルハ夫ノ小説ノ想像デモナク至妙ノ潜水器ヲ使フト云フデモナク只々或ル學問上ノ調べニヨリ知り得タル者ニシテ坐ナガラ此學問ノ眼鏡ヲ照シテ窺ヒ知り又坐ナガラニシテ此海世界ノ有様ヲ諸君ニ御嚙シ致サウト思ヒマス此一種眼鏡的ノ働キヲ爲ス學問ヲ名ケテ「サラツロジ」ト申マス即チ是レハ水産學ト云フ意味デアリマス扱テ海ノ世界ハ兎ニモ角ニモ我々が氣中ノ世界トハ全ク別世界デアルカラ一カラ萬マデ尽ク之ヲ知り得ルコトハマダミ今日ノ學問デハ届キマセン且今晚ハ徒ニ一席ノ御嚙デアレバ詳細ノコトニ及ボス

コノ出來ヌハ知レタコデアアルカラ是レモ亦タ諸君ノ御免ヲ願マヒス

此地球ノ表面一体ハ極々ノ大昔シハ皆水デアツタト云フコトハ地質學ノ定論ニテ諸大家ノ証明スル處デアリマシテ今此論ニ從フハ地球上ノ生物ハズツト大昔シハ悉ク水中ニ生活シテ居タニハ相違ゴザイマセズ今日ノ如ク氣中ト水中ノ別ハナカツタ者デアリマス後地上ニ變化ガ出來テ水底自然ニ高低ヲ生シ高キ部分ハ水上ニ露ハレ初メハチヨボミトシタ小島デアリマシタラウニ漸ク増シテ終ニ大ナル陸地ヲ出來スコト、ナリ始メテ水陸ノ別チガ出來テ夫ノ諸生物モ自然ニ其性質ヲ變シ水ヲ離レテ陸上ニ其生活ヲ保ツコトナリ今日我々が眼目ニ觸ル、ガ如キ澤山ノ生物ガ棲ム様ニナリマシタ去レテ素ト海ハ地上生物ノ本家デアアルカラ今モ猶ホ生物ノ數ハ陸上ヨリ多ク且ツ古來ヨリノ有様ヲ格別變シナイ極古キ種類ノアルコトモ自然ノコトデアレバ世ノ生物學者ハ先ツ海ヲ一番トシテ調査スルト云フ様ナ勘定デアリマス  
前ニ申シタ通り地球上水陸ニ分ル、ニ隨ヒ陸地ノ大ナル

者ガ五ヶ所顯レマシタ是レ即チ今ノ五大洲デアリマス水  
 ハ尙ホ多ク其最モ廣キ處ガコレモ自然ニ五ヶ所出來マシ  
 テ亦五大洋ト申シマス此五大洋ノ廣サヲ通算スレバ凡ソ  
 二千四百四十三萬一千七千方里ニシテ丁度陸地ノ三倍程  
 ニ相當シ其積ヲ勘定スレバ凡二兆〇〇〇二億五千萬立方  
 里アリマス

此廣大ナル海世界ノ諸生物ハ全体其生活ノ有様ガ各々變  
 リテ居テ隨テ種類モ色々區別ガアリマシテ恰カモ我々ガ  
 氣中世界ニ於テ各地ノ生物中其種類ニ區別アル如ク皆一  
 様デハアリマセヌチヨイト鼻先思按ニテハ全シ水ノ中ニ  
 アル者デサウ別ニ種類ヲ生ズルコノアリサウモナキ様ナ  
 レモ海底ニモ亦陸上ト全ク高山大谷沙漠泥澤モアリ林ヤ  
 森ヤ丘陵ヤ平地等モアリテ其場所々々ニヨリテ生物ノ育  
 チ方ガ違フニヨリ生活ノ方法有様モ自然ニ相違ガ出來テ  
 此レト彼レト全所ニ生息スルコトモ出來ズ加之海中ニ  
 ハ一所不斷ノ潮流ガアリマン此潮流ノ爲メ海中ノ或ル部  
 分ヲ遮ラレ甲乙兩所ノ生物ガ往來スルコノ出來ヌ譯合モ  
 アリ其他魚類ノ性トシテ其親魚ノ一遍往來スルカ棲マ井

シタル所ハ其子多ク之ヲ慕ヒ其所ヨリ遠方ヘハ往カヌト  
 云フコノアルニヨリ終ニ各自場所ヲ定メテ棲マ井スル杯  
 ト云フ理由モアツテ海ノ世界中生物ノ在ル所ニ由リヒド  
 ク種類ノ相違ヲ生シタト思召セ

潮流ハ五大洋中數流アリマスガ我々日本人ガ能ク知ル  
 所ノ者ハ本邦近海ニアル所謂黑潮クロシホデアリマス（色ガ黒ク見ユ  
 ルカラ此名ヲ付ケ）黑潮ハ遠ク臺灣ノ近海ヨリ發シ我  
 琉球ノ南ヲ過ギ北緯廿八度ノ邊ヨリ兩派トナリ支流ハ  
 日本海ニ入り本流ハ本邦ノ東南ヲ過ギ北緯三十八度即  
 チ陸前沖ノ所ニ至リ細流ヲ遺シテ俄カニ東南ニ折レ北  
 亞米利加ノ方ヘ參リマス此黑潮ハ元ト暖熱ノ海ヨリ發  
 シマスカラ其脇ノ海水ヨリハ大抵攝氏ノ四五度ノ差ア  
 リテ爲メニ温暖ノ氣ヲ送リマスカラ生物ノ蕃殖ニハ餘  
 程ノ利益ガアツテ殊ニ陸上ノ生物ニマデ其餘澤ヲ及ボ  
 スコデアリマス此黑潮ノ性質及ビ其關係ハ世間ニ於テ  
 マダ詳細ナルヲモ分リマセヌノデ遺憾至極ノコトデア  
 リマスカラ諸學者ハ何ンデモ油斷セズ調べナケレバナ  
 ラヌコトデアリマス本邦近海ニハ又別ニ寒流モアリマ

シテ一ハ「ヲコック」海一ハ「ベーリング」海ヨリ發シ日

ル本邦近海ノ者ニ就テ其有様ノ幾分ヲ御嚙シ申シテソレ

シテ一ハ「コック」海一ハ「ベリリング」海ヨリ發シ日  
 本海及ビ太平洋ニ入りマス現ニ下總ノ銚子湊ノ邊ニマ  
 デ來ルモノモアリマスガ是レハ俗ニ親潮ト申シマス  
 凡ソ水中ノ動物ハ常ニ水中ニ棲井スレドモ矢張陸上ニテ  
 動物ガ氣中ノ酸素ヲ吸取シテ生命ヲ保ツガ如ク空氣ナク  
 テハ生活スルコトハ出來マセヌ唯異ナダル處ハ陸上ノ動物  
 ハ直接ニ空氣ヲ肺中ニ吸取スルト水中ノ動物ハ一旦水ニ  
 混シタル空氣ヲ腮ニテ受クルトニアリマス又其炭酸ヲ吐  
 テ海中植物ノ養ヒニ供スル等モ都テ陸上ニ於ル動植物ノ  
 關係ト少シモ異リタルコトハアリマセン食物モ無論諸クノ  
 有機物ニシテ且ツ所謂生存競争トテ吾レ勝チト弱キ者ヲ  
 取り食ラヒ其中種類ニヨリテハ水中ノ植物ヲ食ヒ或ハ他  
 ノ魚介類ニ寄生スル杯様々ノ方法ニヨリテ生活致シマス  
 サテ是ヨリ海中ノ生物ニ就テ聊カ御嚙シ申上マセウ己ニ  
 前ニモ云フ如ク海世界中ノ千萬ノ物一々之ヲ此ニ説キ尽  
 スコトハ所詮出來モシマセズ去リトテ其品物ノ名稱斗リ  
 ヲ併ベ立テ、御聞ニ入ル、モ却テ繁雜ニナルノミニテ格  
 別利益モナカラフカラ此ニハ我々が常ニ見ナレ聞ナレタ

ル本邦近海ノ者ニ就テ其有様ノ幾分ヲ御嚙シ申シテソレ  
 デ今晚ノ演説ハ御積リトスルコトニ致シマス然シ本邦ハ殊  
 ニ長キ地勢ニテ南北ニ延ビテ居マスカラ寒温熱三帶ノ生  
 物ハ略々此近海ニ生シマス之ヲ少々御嚙シ申セバ海ノ世  
 界ノコトハ先ヅザツト様子ガ分カルデアラフト考ヘマス  
 今此海世界ノ部分ヲ小分ケニ分チテ御嚙シ致シ先ヅ本邦  
 ニ接スル北方及ビ南方ノ海ヨリ始メ次第ニ其中間ニ説キ  
 及プデアリマセウ  
 本邦ノ北ハ千嶋（凡ソ北緯五十度）ニシテ未ダ極海ニハ届カザレ  
 此大抵寒帶ノ生物ハ我北海ニ居ル者ニテ分リマス北海ニ  
 テ有名ナルハ各種ノ海獸及ビ昆布デアリマス海獸ハアシ  
 カ、フットセイ、アザラシ、セイウチ、ラッコ、クヂラ等ニ  
 テ此等ハ皆肺臟ヲ以テ空氣ヲ呼吸シ夫ノ進化ノ規則ニヨ  
 リ益々水ヲ離レテ陸上ノ棲井ニ近ヅク者ニシテ唯ダ長  
 ク水中ニ居ルコトガ出來ルト云フ位ノ違ヒデ實ハ我々陸上  
 氣中世界ノ仲間デアリマス其中デモアシカ、フットセイ  
 等ハ陸上ニ於テ分娩シ不充分ナガラモ陸上ヲ歩行キ殆ン  
 ド空氣中ノ棲居ハ自由デアリマスサレバ此類ハ動物學上

鰭脚類ト稱シ鰭ト足脚ヲ兼子テ居ル者デアリマス殊ニラ  
 ツコハ、イタチト同科ニシテ異ナル處ハ唯ダ後足ガ少シク  
 後トニ向カヒ且ツミツカキ蹠ヲ具ヘテ水中ヲ游グコガ出來ルト  
 云フ斗リデアリマス此鰭脚類ハ平常ハ牝牡子女相伴フテ  
 島ヤ岩ノ上ニ打集ドヒ水中ニアルハ其族類相連リ鰭ヲ  
 立テ、海面ニ横臥シ此中一頭ハ必ズ遠見ノ役ニ當リテ害  
 敵ノ襲ヒ來ル等不意ノ變事ニ用意シテ居リマス鯨ハ海獸  
 中ノ最モ大ナル者ニテ長サ拾丈ニ余マリ種類モ余程多ク  
 アリマス抑々鯨ハ余リニ身体ガ大キク且ツ重クアルニヨ  
 リ陸上ニ棲井スルコノ成リ難キヲ以テ海ノ棲井ニ相當ス  
 ル様ニ出來テ居リマス且ツ此者ハ鼻ガ誠ニ都合ヨキ處ニ  
 付テ居テチヨイト頭ヲ出セバ直グニ呼吸ガ出來ル様ナル  
 頭ノ極上部ニ在テソシナニヒドク体ヲ水上ニ出スニ及バ  
 ナイト云フハ鯨ニ取リテハ至極重寶ナコトデアリマス此  
 鼻カラ時々己ニ吸入シタル潮水ヲ呼氣ト共ニ噴キ出ス有  
 様ヲ俗ニ鯨ノ噴潮ト云ヒ其潮噴孔ト云フハ即チ鼻ノ孔デ  
 アリマスサテ鯨ハ如此大ナル身體デアルカラ不自由ナ  
 ルコト思ハレマスガ幸ニ脂肪ガ割合ニ多ク大層其身體ノ

重量ヲ減シ容易ニ浮沈游泳スルコガ出來マス此鯨ノ食料  
 ハ身軀ノ大ナルニモ似合ハズ至テ細小ノ動物デアリマス  
 元來鯨ニハ齒無クシテ止々上髒ニ世俗ノ鯨ノヒゲト稱フ  
 ル角質ノ板ノ如キ者ガアリテ其板ニハ刷子ノ如ク多クノ  
 毛ヲ具ヘ恰カモ篩ノ如キ用ヲ爲シ細小ノ動物ヲ水ト共ニ  
 口中ニ入レ口ヲ閉ヂテ水斗リヲ出シ遺リタル動物ヲ食ヒ  
 マス  
 鯨ノ重モナル食料ハ鯨兎即チ羅甸名「クリヲ」ト云フ者  
 ニシテ非常ニ大群ヲ成シ數里ニ連リテ居ルコガアリマス  
 都テ鯨ノ其食餌ヲ求メテ游泳スルハ多クノ魚類ハ之  
 ニ恐レテ陸地ニ近ヅキ一ツニ集リテ山ノ如ク水上ニ積ミ  
 重ナルコトガアル程デアリマス然シ鯨ハ箇様ニ大ナル者  
 ダカラ最早海中敵ナシト云フ程ノ者デアラフニ中々サウ  
 デハナク夫ノシヤチト云フイルカノ一種ハ極メテ勇猛ナ  
 ル者ニテ鯨ニ遇フハ忽チニ咬ミ付キ鯨ガ斃レ死スルニ  
 アラザレバ決メ離サヌ位デアリマスソレ故鯨ノシヤチヲ  
 恐ル、コハ丁度小魚ノ鯨ヲ恐ル、ガ如ク偶々之ニ遇ヘバ  
 遽テ、逃ゲ出スト申シマス去レバ海モ太平無爲ノコト少

ク宛角腕力ノ世界ト思ハレマス（拍手大笑）此圖ハ鯨ノ其

二大キクナリマスソシテ遺リタル親昆布ハ追々上方ヨ

ク兎角腕力ノ世界ト思ハレマス(拍手大笑)此圖ハ鯨ノ其稚兒ニ乳スル處ノ即チ哺乳動物ト云フ証據デアリマス

一角即ウニコトモ亦海獸ノ一種ニテ北海ノ産デアリマス身ノ丈ケ二丈ニモ余リ牙ノ長サハ七八尺ニ及ビ左捲キノ螺線アリ其先キノ鋭キコハ刀劍ノ如ク魚類ノ如キハ最も大ナル者モ此牙ヲ以テ一突キニ縱キ殺スト云フ海世界中ノ夜刃共云フベキ恐ロシイ動物デアリマス然シ此牙ハ彫リ物ノ料トシテ至テ結構ナル者ニテ世人ノ昔カラ貴ブ處デアリマス

北海ノ魚類ニテ其重ナル者ハ鱈ニシテ都テ魚ノ種類之ヲ南方ノ海ニ比ベテハ甚ダ少ク其代リニハ全種ノ者ハ極メテ夥ク生育シテ其産スル數ハ中々勘定モ出來ナイ程デアリマス全ク北海中植物ノ重ナル者ハ昆布ニシテ昆布ハ海中ノ岩石ニ附着シテ生長シ其長サ數丈ニ達シマス昆布ハ一種ノ植物ナレモ根、葉、莖等ノ別ナク根ノ如ク見ユルハ他ノ植物ノ根トハ異ナリ只ダ海中ノ物体ニクツク丈ケノ用便ヲ爲シ種子ハ其組織中ニ結ビ自ラ脱出シテ海中ニ浮ビ岩石ニツイテ夫レカラマダ段々

ニ大キクナリマスソシテ遺リタル親昆布ハ追々上方ヨリ枯レ之ニ反シテ下ノ方ヨリハ更ニ生長シ枯レ下ガリ育チ上ボリテ終ニ其中途ニ出合ヒ其處ヨリ離レテ仕舞マス

是レ等ハ皆海世界ニ於テ北方ニ限ル産物デアリマスガ猶ホ追々北極海ニ至レバ冰山疊重シテ海上ヲ掩ヒ尽シ海中ト雖モ氷雪ノ世界ト云フベキ有様デアリマスサレモ其極々ノ水底ニナレバ幾分カ隙間ガアツテ潮水ガ此ヨリ相通シ合テ居マスカラ鯨杯ハ此間ヲ往來スルヲ得ルコデアリマス  
此ヨリ南方ノ海ノ御嚙デアリマスガ其熱帶下ノ海ニテハ生物ノ育チ方甚ダ宜シク之ヲ北方ニ比ベテハ數十倍デアリマス且ツ魚類ハ勿論種々ノ植物モ色彩ノ奇麗ナル實ニ言辭ノ及ブ處ニ非ラズシテ燦々爛々目ヲ奪フ斗リデアリマス是レ畢竟太陽ノ光線多ク其作用ニテ自然ニ此奇麗ナル色彩ヲ生シタ者デ之レニ反シテ北海ノ方ハ日光常ニ暗キヲ以テ生物ノ色モ甚ダ明カナラズイヤニ黒ズンデ居リマス

南海中ノ重ナル動物ハウミガメ、タイマイ、ヲサカメ等ノ龜類エラブウナギ等ノ海蛇ノ類デアリマス、ウミガメニハ二種アリテ一ハ其甲茶色ニシテ常ニ魚類ヲ食フヲ以テ肉、ハ腥ク食用トスルコトガ出來マセヌ俗ニ正覺坊ト云フ龜ハ此者デアリマス今一ハ其甲綠色ニシテ常ニ海藻ヲ食フヲ以テ其体ハ甚ダツロシク醜クケレド肉ハ案外美味アリテ隨分賞翫致シマスコレハ小笠原島邊ニ多ク産シマス夫ノタイマイト云フ龜モ矢張り南海ノ産ニテ其甲ハ透明ニシテ薔薇色及ビ赤色褐色等ノ諸色ヲ雜ヘ奇麗ナルヲ得モ言ハレズ一片千金トモ云フベキ代物デアリマスガ此結構ナル代物ヲ背中ニ載セ無頓着ニモ渺茫タル海中ニ遊ビ居ルトハ海モナカ々々贅澤ナル世界デアリマセンカ(拍手喝采)又海蛇ハ海客杯フナリハ非常ノ大ナル者アルヤニ申シマスレド其實左程ニ大ナル者ハナク大ナルモ四五尺ニハ過ギマセヌ海客ノ俗説ニハ多分大ナル鳥賊ノ脚ナラントノコナレド是レモ信ズ可キ噺シデハナク私ハ其海客ノ見タト云フ大ナル物モ有タニ相違ハアリマスマイガ是ハ海蛇デモナク又鳥賊ノ脚デモナク全ク鯨ノ相連リテ群リ泳

グヲ見テコンナ間違タ噺ガ出來タトシカ思ハレマセヌサテ又海獸ニ屬スル者ハ儒艮等デアリマス其大サハ一丈余ニ達シ齒ハ彫刻ノ料トシテ隨分結構デアリマス馬來人ハ好デ此肉ノ鹽漬ヲタベルト云ヒ我沖繩ニテモ其皮ヲ乾カシ削リテ食フト申シマス儒艮ハ常ニ藻類ヲ食料ト致シマスガ海獸ニシテ藻類ヲ食フハ此儒艮斗リデアリマス又マッコ鯨ト云フガアリマス是レハ動物學上鯨トイルカトノ間ニアル者ニテ其大サ七八丈モアリ頭部極メテ大ニシテ全身ノ三分一二居リ齒ハ唯下髆ニアルノミニテ脂肪最モ多ク身体殊ニ輕ク自由ニ水底ニ沈降スルコトガ出來マセン此者ノ腸胃ノ中ニ一種ノ小キ塊リガ出來テ往々海水ノ上ニ浮ビ居ルコトアリテ古來之ヲ龍涎香ト稱シテ香料ト致シマス

又北緯凡ソ三十度ノ邊ヨリ南緯凡二十五度ノ處ニ至ルノ間ニハ多ク珊瑚島ガアリマス本邦支那近海ノ如キ寒冷ナル潮流ノ來ル所ニハ此珊瑚島ヲ生ジマセヌ是レハ一種ノ珊瑚(世俗ノ所謂珊瑚珠トハ異ナレド)ヨリ成レル洲デアツテ其形ニ三通リアリマス就中巨大ノ環狀ヲ成シ中

ニ大船巨船ヲモ碇泊スルコトガ出來ル程隨分大ナル者ガア

明治二十年五月二十一日

ニ大船巨船ヲモ碇泊スルコトガ出來ル程隨分大ナル者ガアリマス此ノ圖ハ即チソレデアリマス

珊瑚島ノ生ズル原由ニハ少々異論ガアリマシテ「ダーウイン氏及ビデーナ氏ト又センペル氏ライン氏及ビモ

トスリト氏トハ各々見ル所ヲ異ニシ居レモ方今後ノ三氏ノ説稍々勢力ヲ得テ居ル様デアリマス

都テ海中最モ生物ノ繁殖ニ適シタル處ハ此珊瑚島ノ近邊デアリマスナゼナレバ珊瑚島ノ近邊ハ天然ノ地勢ニヨリテ太陽ノ光線ヲ受クルコト多ク海水ノ鹽分ハ増減ノ遽變ナクカケナミハ二六時中絶ヘズ岩礁ニ打チ掛ケ寄セテハ返ス波ノマニ々々多クノ空氣ヲ水中ニ受ケ更ニ之ヲ生物ニ輸クルヲ以テ藻類モ虫類モ其育チ方實ニ夥シク如此餌料ノ多キヲ以テ都テノ魚類ハカヲ費サズタヤスク百味ノ滋食ヲ得生長心ノ儘ニ魚類ノ爲メニハ誠ニ天然ノ極樂世界トモ云フベキ幸福ノ土地柄デアリマス(喝采)

(未完)

貨幣の話

(前號の續)

明治二十年五月二十一日  
大學通俗講談會にて

法科大學教授 和田垣 謙三 講述

林 茂淳 筆記

貨幣の沿革を御話し申すには社會の沿革に目を留めなければなりません。今日は陸にハ蒸氣車あり海には蒸氣船がある故船と云へばいつでも蒸氣船で、車ならいつでも蒸氣車だと思ふと大間違ひです。昔は蒸氣車蒸氣船も無く船は風にまかせ、車は牛馬や人の力で動かしました。今日の貨幣が金で有るから昔から金であつたに相違ないと申すことは出来ませぬ。熟く社會の進歩を考へて見ると、極昔のことは分りませぬが、今日の人智で知ることの出来るので尤も古きのは漁獵の時代で有ります。漁獵の時代とは野山のやまに鳥獸を獵し河海に魚貝をすなごるので、其の時代にはドウいふ者を以て貨幣を造りたかと穿鑿して見ると獸皮を用ひたと云ふと有ります。獸皮は敷き物もまた着物にも至極便利なるものですから貨幣にしたのです。これには色々

證據が有る、扱世の中で最も古い書物の一ツハ舊約全書  
 で有りますが其の約百紀の中に「皮可代皮人凡所有者必  
 悉爲其生命而損焉」と云ことが有ります。又ロトマ、ラ  
 セデモン或ひはカルセーシなどに於て皮の貨幣を用ひた  
 ると云ふことは慥かに歴史に傳はつた居ります。

また言語學の上からも證據が擧げられます。イソニヤの  
 言葉に「ラハ」と云ふ字が有りますがもと皮と云ふ字でま  
 た貨幣と云ふ意味も有ります。丁度日本で「カ子」と云ふ  
 言葉が金にも貨幣にもあたるやうなものです。また近き  
 例を取ればロシアはピートル大帝の時まで皮の貨幣を使  
 つて居りました。ロシア語で貨幣のことを「クン」と云ひま  
 すが其れは貂といふ意味です。ナホ近い例にハ米國のハ  
 ツソンベト、コンペニトで皮を貨幣に用ひました。通常用  
 ふるものはビーバー(海狸)と云ふものです、其の皮を本位  
 として貂の皮三枚がビーバーの一枚に當り、白狐の皮は  
 二枚に黒狐の皮ハ四枚に熊の皮も四枚に當ると云ふや  
 うにして有りました。これを以て漁獵の時代には皮が貨  
 幣の役を勤めてしかも近頃に至るまで勤め續いて居たこ

とは充分にわかりましたでせふ、

漁獵の時代から牧畜の時代になります。其の時代には牛  
 羊が便利です。其の肉は食へ其の乳は飲め其の皮は色々用  
 ひ方が有り、また足が四本あるから重くても引つ張りま  
 はるによいし、生きて居るから腐るとは無いらし、また死ん  
 でも其の時分には衛生のことがやかしくないから食つた  
 でせう。牛羊を貨幣に用ひたと云ふことは古代の詩仙  
 ホーメルの詩の中にダレソレの甲冑は其の値九牛、ダレ  
 ソレのハ百羊だなどと云ふことの有るので、わかりますが  
 またラテン語の「ピキュニヤ」と云ふ言葉ハ金錢と云ふ  
 字で牛、羊をも指します。またヘブリコウの言葉の「カツ  
 サツフ」は羊と貨幣の意味で有ります。またサンスクリ  
 ット語で「ルピヤ」(今日の所謂ルピー)と云ふ言葉はルト  
 パーから來たので其れハ牛、羊を指すので有ります。スエ  
 デン語の「フェー」は富と云ふとよもなり、また牛羊と云  
 ふ意味にもなります。また馬も貨幣の役を勤めた。ドイツ  
 では七世紀八世紀に之を用ひました。日本で。宮に繪馬と  
 云ふものが有り。また金百疋とか千疋とか云ふのは馬を

貨幣に用ひたからで有ると云ふ説が有ります。其の外、

男ばかりの殖民地へ若い娘を賣り込んだとき一頭イヤ一



貨幣に用ひたからで有ると云ふ説があります。其の外、金銀を用ふるやうになつても牛や馬の文をほりつけた者が有る。龍能布雨、馬能負物、龍至靈不輒、以馬爲文佳、と云ふことが或書に見へて居ます。又追風白馬とか云ふ貨幣もありました。また奴隸を貨幣に使つたことも有りますが。アフリカのニウギニアノ如きりの例であります。イギリスなどでも同様だ。日本でも随分自分のか、アを賭けてばくちを打つと云ふとが有りましたが、これは氣の毒千萬ながらツマリ婦人が貨幣の代りを勤めたのでせう。(聽衆大笑)

其れから農業の時代で有ります。ギリシヤの頃から近頃に至つてノルウェーに至るまで穀物を用ひたことは充分證據が有ります。穀物を銀行に預けて利子を取つたことも有ります。エウロッパでは大麥小麥烏麥、メキシコでは南蠻黍また地中海の邊ではオリトツ油、また東印度ではカカヲと云ふ菓物、近頃北アメリカではタバコ一ポンドは三シルリング(日本の八十錢ばかり)の割で、之を貨幣に使はないと三年の懲役に處したさうです。此の時、

男ばかりの殖民地へ若い娘を賣り込んだとき一頭イヤー人に付きタバコ一ポンドで有つたが相場が段々上つて遂に二百五十ポンドになつたと云ふことが歴史に記して有ります。

製造の時代になりますと製造品で貨幣の役を勤めたので、これはアベシニア、スマタラ、メキシ、コペルニシベリヤ其の外、日本などにも其の例が有ります。前に金百疋金千疋と云ふことを申しましたが、これは反物の方から來たので神社にある御幣と云ふ者は則ちもとは襦袢錢でそれが變遷して今日の御幣になつたと云ひます。また稻荷堂などに格子戸が有りますが其の四角い孔に布帛を結び付けるのも賽錢ダト云ふことを或る國學者に聞きました。が何、疋と云ふのは馬から來た者か布帛から來た者か私には其の道に暗くて判斷が出来ませぬ。若し諸君の中に御存じの御方が有らば御教示を願ひます。またタルタリトでは茶或ひは食鹽或ひは釘を用ひたことが有ります。

其の次に色々の飾り物を貨幣に用ひました。抑も飾り

幣の役を勤めてしかも近頃に至るまで勤め續いて居たこ

云ふものが有り。また金百疋とか千疋とか云ふのは馬を

を好むは普通の人情で野蠻人は必需品を缺いても飾ッて見たいと云ふので腕に輪をはめ耳に輪を下げ或ひは鼻に輪をかけマルデ善光寺参りの牛のやうて。す（聽衆大笑）諸君はひ笑ひになりました。しかし、これは野蠻人民をかりの事では有りませぬ。學問を修めることはアートにして道德はアートにして先づ西洋服を着たりダイヤモンドの指輪をはめたり（喝采）金時計をひらくツたり（喝采）躍ッたり（喝采）はねたり（喝采）飛んだり（喝采）さういふことをするのが眞の文明だと思ふ者が有ります。（喝采）斯の如く虚飾ハ人の尤も好む所ですから修飾品を貨幣に用ひたのです。例へを北米印度人はワンプンペッグと云ふ貝を貨幣に用ひ、また東印度又はアフリカ等に於ても貝を用ひ或ひは琥珀象牙又は寶石を用ひました。日本にても上古以米買物今則求玉買物なると云ふことが有ります。支那でも賣と云ふ字も買と云ふ字も貨幣の貨の字も財の字も皆な貝の字が付て居ますから貝が貨幣で有ツたと見えます。

貨幣と云ふ者は右の通り時代により國により千種萬類て

有りますが貨幣の沿革談はまだ盡きませぬ。茲に一ツの最も貨幣の役ニ適したものが有る。前のは皆昔のもので今日有るにしても野蠻國にのみ用ひられるものです。文明國に用ひられるものは何かと云ふとこれは深く考へるには及をない。金銀です。今日の人間の智慧では貨幣を造るよは金銀に勝るものは無い。金銀のみならず其の他の金屬で銅、錫、鉛、白金、ニッケル其他混合金屬など貨幣の役を勤めました。

これでもまだ貨幣の沿革は畢りませぬ。世の中に紙と云ふものが有りまして色々の役をえるものですが。貨幣もこの紙で造りました。しかし前のもものと比べると紙幣は代理のやうなもので一圓の銀券は銀行に持つて行けば一圓の銀貨に換へて呉れます。今日の紙幣ハ兌換紙幣と申します。昔は紙幣は無いが皮幣と云ふ者を用ひました。支那でハ漢の武帝の時に代理貨幣の談が有りましたが、一体代理と云ふとは誠に便利をた。本人だと中々重々しく「うれ馬車、うれれ供だ」と云ツて大變です。代理だとシリツパシヨリか何かでチャラチャラと出がけて行ツて

ずぐ用が済みます。其れで本人の方では本人で無ければ

でも喜ばしいことで有ります。

すぐ用が濟みます。其れで本人の方では本人で無ければ  
いけぬことに従事することが出来ませう。經濟上に於て  
代理貨幣の要用なることは論を俟たぬことです。

ところが紙幣で代理で無く本人を氣取るものが有りま  
す。即ち不換紙幣です。これは本人がマシンなら人が信  
用するからして代理人もよい氣になり、今度は本人氣取  
りになつてしまふのです。初めハ虎の威を假る狐であつ  
たが、終りには虎に化けたる狐になります。しかし化物  
で有るからイツカ尾を垂れて逃げ出すに違ひ無い。(喝  
采)しかし困つたことには逃げる際に亂暴をします。(喝  
采)世の中に不換紙幣ほどコワイものは有りませぬ。

(喝采)多クアル國の中に此のねバケに出合はなかつた國  
は一ツも有りませぬ。諸君は日本よ於いても晝、日中この  
ねバケが往來したのを御覽になりましたらう。(喝采)し  
かし有り難いことには政府の勇氣と大英斷とによつてこ  
の大化物を首尾よく退じてしまはれまして、先達もタシ  
カ鹿鳴館にて頌徳會とか云ふことが有りまして。(喝采)  
銀行者の爲めには尤も喜ばしからうが四千萬の同胞に取

ても喜ばしいことで有ります。

これで貨幣の性質、作用、沿革の極アラマシを話し致し  
ました。此のことをよく考へ下されば貨幣は恐ろしい  
もので無い一つの道具だと云ふことをお分りになりまし  
たらう。道具だからこれを用おなければ用を爲さず、ラ  
ムプを掾の下にをいても用を爲さないと同様で有ると云  
ふこともお分りになりましたらう。(喝采)貨幣は千萬圓  
積んでもイクラ積んでもたゞ貨幣大明神とやつて居たら  
主人と云ふものは自らを奪ふ即ち自分で自分をドロボウ  
するもので有ると云フコトもお分りになりましたらう(喝  
采)また富トハ金銀で有ると云ふ貴金説と申すとの間違  
つて居ると云ふこともお分りになりましたらう。また商  
賈制度即ち英語でメルカントイル、システムと云ふこと  
が有りまして外國と交易をするに金銀さへ這入れば國が  
盛んになると云ふとの誤りで有るともお分りになりまし  
たらう。また紙幣は兌換には及ばない不兌換でよい。兌換  
なら金銀の兌換で無くてもヨイと云ふ人も有りますが其  
れも間違つて居るといふこともお分りになりましたらう

斯の如く此のことを深く考へになるならば世俗の流説の誤れることが分りになります。(喝采)

終りに臨みて一つの昔話しを致しませう。今は昔或る國に三人の子息を持つた親が有りました。身代を子供に分つて自立のみちを計らせやうと考へました。然るに此の家は貧乏で田地をやること出来ず、外に財産とて有りませぬ所から親父は長男に鶏一羽をやりました。(聽衆大笑) 次男には鎌を一挺。また三男には猫を一疋やりました。(聽衆大笑) 「サアこれを前たちにするから。これを資本にして各々立身をしろ」と云ひました。

總領と一羽の鶏を大事に抱いて家を出ました。されども鶏は何處にもあるので江南江北鶏鳥の聲だから賣らうと云つても話しにならない。うここでこれはなんでも廣く世間を渡つて見なければならぬと思ふて、或る島國に行きました。所が其の島には鶏が無いのでソコ島人が其の島の規則たゞしく一番鶏二番鶏と云ふやうな時を知らせること、驚きました。當時、時計も無いことであれば「これがあれば島中の幸ひドウか賣つてはくれまいか」と云ふ

から「其れは御相談によつては賣らないことも有りませぬ」と云ふので、遂に驢馬の背に積めるだけの黄金と引換へて家に歸りました。

次男は「ナニ甚六に負ける者か」と云つて鎌を持つて家を出ました。所がドコの軒の下にも鎌が有るから賣らうと云つても誰もかまふもの無い。(聽衆大笑) 其れから或る島へと参りました。所が其の島には鎌が無いから百姓が鐵炮を撃つて刈り入れをするに云ふ譯で實に無鐵炮でした。(聽衆大笑) 其れゆゑに村南村北鐵炮の聲で鐵炮から火事が出て屢々野火事、山火事、畑火事などが生じました。ソコへ、先生鎌をふりたてゝ行つた所か「コンナものが有つたら島中の幸だ何と讓つては貰はれまいか」「これは御相談によつて賣らないものでも無い」と云ふので今度は馬の背にしよへるだけの黄金を積んで家に歸りました。

三男はアニキ等に負けるものかと猫を抱いて勇ぎよく出かけたが家南家北三毛猫の聲で仕方が無いから或る島に渡つた所が不思議なるかな其の島には猫が無い。猫が無い

がゆれば島中の幸ひドウか賣ッてはくれまいか」と云ふ

渡ッた所が不思議なるかな其の島には猫が無い。猫が無い

から鼠が多くて、飯を食ふとき膳碗の中に這入りて困ると云ふ所へ「私はかういふものを持って居ますが、これは鼠を捕るには妙だ」と云ひましたら其のを島王様の耳に入りお召しになつたに付き、かしくまったりと云ふので宮殿に参り鼠の一ぱい居る中へカノ猫をはうり出した所が長ながの間の旅路で鼠を食はなかつたものだから忽ち數十疋食ひ尽しもした。「これは奇妙だ奇猫だ」と王の喜び斜めならず「ドウだ其れは譲れないか」「へー御相談によつては上げられぬことも有りませぬ」と云ふと王の仰せらるゝに「其れは如何をかりの幸だが、逆も臣民等には買へまい朕が買ッてやる」と云ふ譯で今度ハ象の背に黄金をつけて三男は意氣揚々として家に歸りました。さて私の今晚の話は通俗の講談で學問上の深いことでは有りませぬ。しかしドンナありふれたものでも之を用ふるに、の道を得れば大いなる功を奏すると云事は右の昔話で御分りになりましたらう。ごく單純なる道理が分らない所からして經濟世界の東西を辨ぜず晝夜を分たぬことがある。かういふときには例の鶏でも役に立ちませ

う。或ひは貴金説とか商賈制度とか云ふ雜草が茫々として眞理の野を覆ふことがある。かゝる時には例の鎌でも役に立ちませう。又世間に不換紙幣説の如き邪説の鼠が猫の居ないを幸にあばれ廻る時ハ例ノ猫を放つべしうこで私は諸君に此粗末ながら鶏と鎌と猫をさし上げました。甚だ御粗末ですが諸君が之を以て象の背に乗るほどの黄金を得らるゝか、僅かに蠅の背に乗るだけの黄金のを得らるゝか其れは諸君の此働き次第です。

(大喝采)

○

微粒子病肉眼鑑定法(前號の續)

東京農林學校教諭 佐々木忠二郎

「シリドヂ」「オキチヂミ」「ハラクダリ」等の病蠶は種々の病患に罹りたるものにして微粒子毒のみに罹りたるものと看做すべからず扱右の如く種々の病蠶を連ね記し其病因如何を論述したる所以のものは他にあらず世間には往々何れの病蠶にても其病因は之れを探求することを勤めずして無暗に彼れも微粒子毒に罹りたるも

のなり是れも微粒子毒に罹りたるものなりなどと言ひ  
 觸らす人の爲めに忠告せんとする老婆心に出でたるな  
 り但し微粒子毒に罹りたる蠶兒には罕れには其皮膚面  
 に黒褐色斑を呈することあり此黒褐色斑の如きは歐洲  
 地方にてハ随分微粒子に罹りたる蠶兒に存する特徴な  
 るがゆゑに其地の學者輩ハ黒斑病の名を命じたりと云  
 ふ日本にてハ前にも陳じたるが如く黒色斑を呈せるも  
 のは敢てなしと云ふには非らざれども決して多くある  
 ものにあらず世間の人或は微粒子に罹りたるものハ總  
 べて皮膚に黒斑を呈せるなどと誤認するもの尠からず  
 甚しきに至ては蛆の寄生を受けたるがために蠶兒の氣  
 門に黒褐色斑を呈するを視て微粒子毒に罹りたるの特  
 徴と看誤るものあり豈慎まざる可んや

第四 凡う各種の疾病ハ罹りたる蠶兒は必ず何らの病徴  
 を呈するものなれども此病徴に依て一概に微粒子毒に罹  
 りをるや否やは之れを蠶体の外面より辨別することを得  
 ざるなり加之各種の病子なるものは悉皆之れを取除きた  
 りとて微粒子毒に罹りたる蠶兒は餘さず除去したりと云

ふ可らず何んとなれば各種の病徴を呈するものにては微  
 粒子毒に罹らざるもありて尙ほ微粒子毒に罹りたる蠶兒  
 にても第三條に述べたる病徴を其外面に呈せざることあ  
 ればなり蓋し何等の病徴を呈せずして微粒子毒に罹りた  
 るや否やを鑑定する方法は未だ泰西にては日本よても  
 認識したるものあらざるなり尙ほ養蠶に熱心なるもの世  
 ハ數多ありと雖ども此要點に就きて充分の研究を遂げざ  
 るを恠むなり余は此要點に就きては研究すると數年の久  
 しきに亘たり漸々にして健かなる状態をなせる蠶兒に微  
 粒子毒を存するや否やを鑑別するの特徴を發見せり其特  
 徴の如きは蠶兒の体軀の腹面にありて常に小點紋の狀を  
 爲すものなり此特徴に據りて蠶兒を選分けたらんには微  
 粒子毒に罹りたる蚕兒ハ悉く之れを取除くを得べし世の  
 養蠶者は勿論苟も蠶兒の病因に就き研究するところの人  
 は宜く實物に就きて其特徴の存する處を取調べ微粒子  
 毒に罹りたる蠶兒と之に罹らざる蠶兒とを選み分けたら  
 んには健全病因なきの蠶兒のみを得べき也凡う此特徴に  
 據りて蠶兒を選分くるは蠶兒の發育中何れ時に於てする

やと問はば余は三眠起の頃より結繭前途に在いて爲す可  
しと答へん何んとなれば此時に及ばず蠶兒の体軀は稍や  
太とり容易に此特徴を検出することを得べければなり今  
ま若し此特徴によりて有毒と無毒との蠶兒を選取ること  
は随分時間を消費することなるべしなどと思ひますもの  
もあらんが決してさることなきことなり一たび此特徴  
を熟知したる養蠶者は勿論或ハ養蠶の業に疎き人よても  
此特徴を了知したらんには一個人にして尠くとも一時間  
に數千頭の蠶兒に微粒子毒の存するや否やを辨別し健全  
無病の蠶兒を得べきなり努々疑ふべからざるなり之れを  
疑ふ人ハ此特徴を了知せざる人なりとしるべし蠶兒は四  
度の眠りを経て結繭せんとする時には復た病蠶と認めた  
るもの及び右の特徴を存するものハ嚴しく取り除くべし  
第五 蠶兒は繭を營み其中ちに蝻して蠶蛹となりたる時  
に於て之に微粒子毒の存するや否や鑑別せんと欲するは  
只だ繭面よりして爲すこと能はず必らず繭内より蠶蛹を  
取出して之に存する特徴を調査せずんばあらず但し繭の  
形ち尋常ならざるか之に厚薄ある者或は玉繭の中に籠

れる蠶兒蠶蛹の如きハ己に疾病に罹たることは疑ふべう  
もあらざることなれども必ずしも悉く微粒子毒に罹りた  
るものとは云ふべからず尤も玉繭の中ちよ存する蠶兒蠶  
蛹の如きは微粒子毒に罹れるもの尠からず尙ほ繭の形ち  
正しからざるか繭に厚薄あるものゝ中に存する蠶兒蠶  
蛹の如きには地方によりては蛆の寄生を受けたるも亦尠  
しとせず且又良好の繭の中に籠れる蠶兒蠶蛹にも微粒  
子毒に罹れるものあれば是非とも繭内の蠶蛹は之れを取  
出して調査せざるを得ず之れを調査して蠶蛹の体軀特に  
翅鞘若くは腹面等に一種の特徴を呈せるものは必ず微粒  
子毒に罹りをるものなり

(未完)

雜 報

○全世界植物園の數 現今地球上には一百九十七箇處の  
植物園あり即ち大ブリタニア及び愛爾蘭あいらんどには十二箇 プ  
リタニア殖民地には二十七箇、獨逸國にハ三十四箇、佛蘭  
西國并に其殖民地には廿五箇、伊太利國には廿三箇魯西

亞國は西比利亞國と共に十七箇、奧太利、匈牙利國には十三箇、スカンヂナウ<sup>半</sup>ア國に七箇、白耳義和蘭、西班牙、亞米利加合衆國には各五箇、ポルトガル國、瑞士國には各三箇、デ子マルク國、ルメニ<sup>ニ</sup>ン國にハ各二箇、ブラジリ<sup>イ</sup>ン國、智利國、加奈太國、埃及國、希臘國、グアテマラ國、日本國、ペール<sup>ー</sup>國、セルビ<sup>イ</sup>トン國には各一箇の植物園ありと西字新聞に見ゆ

○パストール氏 (Pasteur) は前號より死去の旨を記載したる ヴルピアン 氏の後任として「パリス」理科大學の書記に任命せられたり

○パラフ<sup>ン</sup>油 透明無色無臭無味濃厚にして漸く四百度以上にて沸湯する「パラフ<sup>ン</sup>油 Paraffinum liquidum) は水分を毫も含有せざる「クロ、ホルム」并に「エーテル」に溶解すれども水分少しにてもあるときは忽ち渾濁を生ずる性質あるを以て近頃之を水分を檢するに用ひたる人あり例へを今茲に甘立方センチメートル「クロ、ホルム」或ひは無水「アルコホール」ニ五十の〇、「アルコホール」○四立方センチメートルを加へ之れに「パラフ<sup>ン</sup>油」

二滴を滴加すれば著しく渾濁を呈す此の反應によりて「アルコホール」中〇、〇〇ニ容量の水分を檢し得るなり

○伯林理科大學 伯林理科大學にては先般伯林府の醫師ドクトル、ラウ<sup>ン</sup>ツツ氏 (Dr. Ravitz) には無頭蟲の中樞神経系統に關する研究費として九百「マルク」ボン府の教授ヌツスバウム (Prof. Nussbaum) 氏には「サン、フランシスコ」地方に旅行し有機体分布の状態を研究する入費の一分として三千「マルク」ヒル<sup>ン</sup>シュベルグ 府のドクトル、ゾット<sup>ー</sup>ザ<sup>ハ</sup>リアス氏 (Dr. Otto Zaeharias) には北獨逸の湖水等に棲む動物類の研究に關して六百「マルク」。

ドクトル、カトル、シユミット (Dr. K. Schmidt) 氏には地質學上ピレネ<sup>ー</sup>トン地方旅行費として千二百マルクを補助したりと云ふ

○火葬會延期 前號に記したる火葬會は明年四月迄延期になりたる旨近着の新聞に見えたり

○女子大學教授となる チヨル<sup>チ</sup>婦人 (Church) は歐洲に於て有名なる諸先生の「クリニク」に陪し醫學を研究し醫學士の學位を得られたる人なるが今回「ポストン」大



學の婦人科學教授と爲られたる由なり

(本年六月廿八日獨逸醫事週報)

○結核バチルレン蠅の媒介に由て傳播す スピルマン氏及びハウスハルテル氏は結核「バチルレン」が蠅の媒介によりて傳播するに關し、試験をなし其成績を「パリス」理科大學に申報したり蓋し同氏は結核患者のたんこきの上に坐せる蠅を取り之をガラス盃の中に入れ置きたるに翌日に至り此蠅死せるに由り其ガラス面は附着せる蠅の排泄物并に蠅の体内を檢したるに無數の結核バチルレンを得たりと云ふ

○書籍猩紅熱の媒介をなす ドクトルロシムソン氏は或日一猩紅熱患者を訪ひたるに嘗て同氏が他の猩紅熱患者の家にて見たると同一ノ書籍を見出したるに由り胸中疑を起し患者に子細を問はるに同患者は嘗て一回も猩紅熱患者に接したるをなく此書籍を得てより二日後に發病せりと述べたり故に貸本屋の書籍を借覽する人々は最も此邊に注意し、又貸本屋に於てもよく注意して其家にて全病根の滅尽せる後よ受取り一定の方法を以て消毒し然

る後世人に貸渡すべし云々と Brit.med. Journ. に見たり

○ヒルトル氏 埃太利國の大家ヒルトル氏 (Hofrath. J. Romelli) は學術に關し頗る効績あるを以て埃太利國皇帝陛下より金賞牌を贈與せられたりと云ふ

(本年九月一日獨逸新聞)

○獨逸國醫科大學々生の數

- ペルリン大學 千百四十人
- グライフスワルド大學 五百二十八人
- ブレスラウ大學 三百九十人
- ボン大學 三百七十一人
- ハルレ大學 三百三十人
- マルブルヒ大學 三百〇三人
- キール大學 二百九十二人
- ケーニグスベルヒ大學 二百七十八人
- ゲッチンゲン大學 二百四十八人

○ベルリン醫科大學懸賞問題 ベルリン醫科大學にては來年の懸賞問題三ヶを提出したり  
第一、骨の内部并に表面に現る、處の物質にして「ミエロ

プラクセン」(Myeloplaxen)「ヌステフクラステン」(Osteo-  
Klasten)并に巨大細胞と稱せらる、者の性質。成立并に其  
成行<sup>ナリニキ</sup>に關して精確の比較的検査をなし圖書或は檢微鏡的  
標品を添へて差出すべき事

第二、血液中脂肪の量増加せば血行殊に脉動に如何なる  
影響を及ぼすべきや

第三、末梢神經交互の連合并に神經幹と連續の模様は付  
ては從來種々の試験并に説あれども一も精確なるものあ  
らざるを以て尙研究を遂ぐべく殊に板様鞘 (Lamellose  
Scheide)と神經内鞘(Endoneurium)との關係及び神經内鞘  
の性質并に淋巴管と神經本幹の間にありて注入し得べき  
淋巴間隙 (Lymphräume)との關係に付て精細の試験を  
なすべき事

○喫煙の害 喫煙の害に關してドクトル。セルデン氏  
は次の面白き文章を記したり曰く煙草の烟<sup>けむり</sup>はリチャル  
ドソン氏の説によれを水蒸氣。煤(非常な細微なる態に  
て)。氣狀アンモニア化合物。炭酸。亞酸化炭素及び不純  
粹の氣狀「ニコチン」より成り此外に有機(酸類醋酸。蟻酸。

酪酸。纈草酸。青酸等)は「クレヲソット」并に二三の水炭素  
化合物及びエーテル、バトゼン(油基)と共に其中に存在  
し煤ハ齒并に齒齦を煤色に染め「アンモニアク」は舌をい  
ため唾液の分泌を促し血液には分解作用を呈し炭酸及び  
亞酸化炭素は身体に疲勞を覺へしめ頭痛を起し心動をし  
て不正整ならしめ筋肉震戦并に嘔吐を起す此等の作用は  
「ニコチン」の大に幫助する處なり揮發性燃焼産物は呼  
吸を困難ならしめ口臭を生ぜしめ喫煙に慣れざる人をし  
て一種固有の不快なる状態に陥らしむ浸出し得る一種の  
苦味質即ち「ヤニ」ハ嫌惡すべき非常に鋭き味を有すると  
ハ嘗て掃除不行届なる煙管を用ひたるもの、よく知る所  
なるべし喫煙によりて起る中毒の症候は阿片并にクロイ  
ホルム中毒によりて起りたる症候に等しく運動神經に對  
してハ衝動劑となり(Iritans)知覺經に神對してハ魔酔  
劑(Narcoticum)となりて働くものなり煙草を用ひても此  
等危害の幾分を免れんとするよは成る丈け煙管殊に蛇行  
狀にして彎曲の多くあるものを用ふべし(土耳其の「ナ  
ルギレット」「フリエント」の「ホーカー」なぞは最もよし是

或ハ長キ蛇行彎曲を經過し或ハ經過の際冷水を以て冷却せらる、故に自然清淨になりて喫煙者の口腔内に來る故なり)短き煙管を用ふるとは最も危険の事なり葉卷煙草(Cigarette)を用る際には次件に注意すべし

第一、室内にて喫するとなき成る丈開豁なる大氣中にて喫し毎日一本を超ゆへからず

第二、卷煙草ハ成る丈乾燥したる古き粗製ならざる煙草を擇ぶべし如此煙草は「ニコチン」<sup>○</sup>鹽粟<sup>○</sup>ビルゼンクラウト<sup>○</sup>莨菪<sup>○</sup>ステヒアツペル(此等の毒草少許なれども他の種類の煙草に含有す注意すべし)を含むと最も僅少なるが故なり

第三、常に尖端より喫すべし長ければ長き程よし

第四、一本の煙草の灰になる迄喫し尽す勿れ

第五、喫煙の後には必ず口腔内を水を以て洗淨すべし

第六、決して紙卷煙草(Cigarette)を喫する勿れ

○ワイコッフ氏の書翰 前々號に掲載せし文科大學教授外山正一氏の論文又關しワイコッフ氏が一書を送せられし故左に其譯文を掲ぐ

東洋學藝雜誌記者

去月御發兌の貴紙上に外國宣教師等は東京を始め其他の地方に帝國大學の豫備門たるべき高等中學校と同一の學校を設立せば傳道上賢き一策なるべしとの外山教授の御考案を拜讀仕候

扱此御考案は外山教授の折々御吐露被成候他の御考案の通り至極結構にて拙者も全く御同意に御座候然し俚

諺に「薔薇を薔薇と呼ばずして他名を命ずるも香氣は同様なり」(a rose called by another name will smells

as a rose)と申候如く假令他の名を冒すも同様の教育を施す學校は尋常中學校若くは高等中學校に同じき効力可有之愚考罷在候外山教授は傳道會社の設立に係る

學校には一も帝國大學の豫備校たるべき教育を施すも

の無之様被思召候得共他の學校も外山教授の御注文に應じ候者とは信じ候が他の事なれば委細は不案内なれば何共申上兼候得共明治學院普通學部にては外山先生

の御考案に従ふたる趣旨にて學課相定め本年の明治學院一覽出版の頃に知り得し限可及丈高等中學校の學課

と同一なる様取極め申候然し高等中學校の末年學課は

明治學院普通學部にては教授不仕候尤も法科大學と文科大學へ入學志願の生徒の爲には普通學部卒業の後に専門科を設けて之を修むれば法文の二分科大學へ入學相成様都合相付居申候然し醫科、工科、理科の三科大學に入るべき高等中學校の末年の學科は教授不仕候拙者等は外山教授の御考案の要點を既に履行し居候へば取も直さず御考案は御尤至極也と信ずるの論より證據を呈する者なり拙者等は以來彼は外山教授と拙者等が教育したる者なりと自慢し得べき生徒を大學に送り外山教授の級に入れて机下に御薰陶を爲相仰度不堪熱望候

匆々頓首

明治學院教師

明治二十年十月

エム、エヌ、ワイコッフ

敬白

東洋學藝雜誌編輯者

机下

○日蝕餘聞 何處も同じ、本年の大混雜は例の八月十九日の日蝕にて今ゲア (Gaea) 雜誌より其大意を左に摘載すべし

歐洲にて日蝕區域内に入る地方は學者と無學者とを問はず近來の珍事なる日蝕を皆々觀察せんと夫々薰烟玻璃遠望鏡などを用意して待受しも不幸なるかな到る處天氣好からずして充分の結果を得ずに了りけり、然るに好運なるは獨り地理局の荒井郁之助氏にて過日地學協會にて公衆に幻燈を用ひ示せし如く同氏の越後に在りて撮影せし日蝕寫眞は稍々完全なるものなれを歐洲の學者の大に羨む所なるべし今其頃獨國ベルリン府の有様を聞くに觀測者及び望觀者は該都府の南部なるマリエン、フェルド (Marienfeld) に群集せり前晚より爰を通る臨時瀝車一萬の切符は盡く賣切れし程にて尙ホ他より來るものを合算すれば十萬に下らざりしと云ふ獨國にて蝕し始めは拂曉四時五十分なれば望觀者は草を枕に野宿せしもの數多く又小川の河原にて夜を明かせしもあり或ハ徹夜麥酒壘を倒して日蝕の節は醉に乗じて望遠鏡を兩眼に當てず反て壘を口に向けしもの多かりしは可笑ことなり」斯く待受し日蝕も曇天にて皆既の時は觀測を飲き陸軍省よりは風船を浮べ雲上に出で、觀測せしめんと爲せしも半

にして下れり又獨乙全國到る處同時に電通せしに皆々不  
運にて良結果を得ず唯後回の日蝕に好天氣を望むの外な  
しと云ひ送れり前に述べし伯林の朱引外群集中にプロミ  
子酒 (Protuberanzen bitter) と稱し日蝕に事寄せて賣る

もあり、雲中に日蝕過ぎ去りし後は大聲に新聞を手に取  
り群中を呼び歩行くものあり日蝕は本日雨天に付き次の  
日曜日(Starnecker am Saal)に於て舉行すべしと  
言ひ觸らし、一時隨分人心の日蝕事件に傾向せし様子な  
り又白耳義人ニーステン (Niesten) は不幸中の幸人にて  
同氏ハ魯國のユルエビツ (Jurjewitz) に觀測せしに蝕始  
は午前六時十二分なりしも雲の爲に遮れ既に失望斷念せ  
し所皆既前に至り突然晴天となり數枚の寫眞を撮影せり  
と尙ほ魯國にて晴天に學術上の觀測を爲せし所一ヶ所  
(Katinsky) ありしと云へば良結果ありしなるべし

○黒き雨 英國のカスルカマル (Castlecornel) と云ふ所に  
ては奇數なる空氣顯像起れり并は或日午後四時頃にて空  
掻き曇り稍々暫時の後は嵐と變じ大雨を降らせり然るに  
電光收りて後ち濃き黒き雨非常に降り來り白き衣服を着

用したるものは濡れて忽ちに黒服を換用したるが如き奇  
觀を呈し谷川并に泉井も皆黒色を帯び飲用と爲すを得ざ  
りしと云へり原因は報道者の未だ知らぬ所なり

○胎兒の性を前知する法 或蘇格蘭土の醫師ハ永く亞弗  
利加洲に住居し又親しく土人に接し居りし所初生又は弟  
二の子供は統計上女兒多數を占むるとに氣付し故に數年  
間各處の土人にも注意せしに同様の結果あるを見出せ  
り、全體同地方は温暖にて且又社會野蠻なれば早婚行る  
、と勿論にて初産の頃は婦人の方は未だ全く壯年、達せ  
ざる年齢なれば、身體弱し、然るに男子の方は何れも腕力  
社會なれを壯強の人物に非らざるはなし斯く兩性に大な  
る差を生じ之を産落す小兒の男、女性に及ぼせりと、要す  
るに夫婦共に均しく壯康ならず一方大に身體上に強く優  
る所あれば必ず反對の(男女)性なる小兒を産むを通例な  
りとす、日本にては如何のものなるや

○透明ノ圖引紙 尋常の圖引紙ヲ透明となして謄寫用に  
供し又其謄寫を終るの后右の不透明紙に復せしむるの便  
法は嘗てコムパスチール氏の發明する所にして其法の先

づ紙の厚薄に由て一定の「カストル」油を無水「アルコ  
 ール」の一、二若くは三倍の量に溶解して之を海綿に浸し  
 其紙を潤す時は「アルコール」は暫時に蒸散して透明なる  
 圖引紙を製し得べし是よ於て鉛筆又は「インヂアン、イン  
 キ」を以て圖を寫し取り然る後之を無水「アルコール」  
 中に浸漬すれば容易に油分を去りて元の不透明紙に歸す  
 るものなり勿論其油分を除去するよ用ひたる「アルコー  
 ル」は爾後の製造に供する油を溶解するよ使用するを得  
 べしと云ふ

○人造肥料 北米南カリナ洲に於ては一千八百六十年  
 頃迄は肥料製造の業もなかりしが其創業以來漸々盛大に  
 赴き現今同洲に於て最も緊要なる事業となれり今其進歩  
 の景況を記さんに

年 製造所 資本 製出

一千八百七十年

二

三五〇、〇〇〇弗

四二五、〇〇〇弗

一千八百八十五年

一四

三九〇〇、〇〇〇弗

三、五七四、〇〇〇弗

右肥料の原質は同洲の海岸及河邊に夥しく存在する所の  
 磷酸鹽にして其農作肥料に大に價あるを發見せし以來

斯の如く盛況に至りしものなり又南カリナ洲より肥料  
 の船載は一千八百八十五年には一五〇、〇〇〇噸一千八  
 百八十六年にハ一九六、八一四噸となれり

○獨逸の日本地圖 曾て本誌に登載せし獨國のゴータ  
 (Gotha)にてハッセンスタイン氏(Hassenstein)の調製せ

し本邦地圖前部(價十二マルク)は既に二年前に鏤行せし  
 が今般發行せし其後部は即ち日本東國并に奥羽、北海道、  
 千島の三枚にて比例は百萬分一の圖なり、加之に東洋の  
 總圖一枚を増刊せり、(後部價十二マルク)此圖ハ前部と

同じく製圖精細、地名正確、地形明瞭にて斯く善良の本邦  
 圖歐人の手に成りしは驚入たる次第なり

○帝國大學運動會陸上競技 帝國大學運動會は毎年春期  
 には競漕、秋期には陸上競技を行ふ筈にて本年も去る二

日に陸上競技を行ひたり場所は大學構内の運動場にして  
 舊加州藩邸の園庭跡なれば後に山を帯び木樹は紅葉にし  
 て風景極めて面白く加ふるに色々の旗を以て粧飾し又一方  
 には化學室の新築殆ど落成せしあり天氣は快晴にして熱  
 からず寒からず戶外運動には尤も適當の日なりしかば皇

族始貴顯の方々會員及其親戚等來觀者の數は夥しかりし  
 扱て當日競技は正一時に始り五時半過に終りたるが其番  
 組及勝手は左の如し但去十月廿八日已に豫定競技を行  
 ひ其節の最優等の者のみ本日の競技に加はるを得たるな  
 れば當日の競技者は何れも倔強の者のみなりしなり

第一番 百ヤード豫定競走○是は總ての申込人を三組に  
 分ちて競走せしめ各組より最初の三人を取り最後競走  
 に走らしむるなり

第二番 クリケット球抛 第一(七十九ヤード一咫、四吋  
 半) 久保○第二、守田○第三 猪俣○第四、増田

○第五 三池

第三番 百ヤード競走最後 第一(一一、八秒)奥山○第

二、三池○第三、野村○第四、橋本 ○第五、武田

第四番 高飛ビ 第一(四咫七吋)猪俣○第二、奥山○第

三、日高○第四、楨田○第五、渡邊

第六番 二百二十ヤード競走豫定三組

第七番 砲丸抛 第一(三十一咫三吋)増田○第二、猪

俣○第三、堀○第四、西久保○第五、武田

第八番、二百二十ヤード最後競走 第一(二八、二秒)奥

山○第二、久保○第三、三池○第四、橋本○第五、廣

瀬

第九番 長飛ビ 第一(十六咫八吋半)寺島○第二、奥山

○第三、柳谷○第四、李家○第五、日高

第十番 文部省直轄學校生徒競走 (一周、即三百六十四

ヤード)第一、五一、二秒枝國(第一高等中學校)○第二、

中田(同)○第三 那珂、同○第四、成田(同)○第五、前田

(商業學校)

第十一番 四百四十ヤード競走 一、(六三、二秒)武田、

○第二、久保○第三、三池○第四、神崎○第五、奥山

第十二番 柵飛ビ豫定競走 三組

第十三番 來賓競走(一周)

來賓中此競走に出られたる者七人なりしか第一は英人

アーノールド氏第二は古賀氏にして時間は五一、四秒

なりし

第十四番 棒飛ビ 第一(八咫十吋)猪俣○第二 白戸

(八咫九吋)○第三、奥山○第四、中屋○第五、諏訪

此競技ハ何時も觀る人の最樂みとする處なるが今回猪俣白戸の競争の如き最と面白ありし

第十五番 學習院生徒競走(二百五十ヤード) ○第一、

水下○第二、渡邊○第三、吉井(謙次郎)○第四、吉井

(信實)○第五、三島

第十六番 柵飛ビ最後競走 第一、猪俣○第二、李家○

第三、奥山○第四、中屋○第五、生田

第十七番 槌抛ケ 第一、六十五尺一時) 諏訪○第二、

神崎○第三、猪俣○第四、野村○第五、武田

第十八番 三脚競走 第一、久保、李家○第二、高橋、

林○第三、米田、田中

第十九番 八百八十ヤード競走 第一、(二分、三十二秒)

神崎○第二、築波○第三、大鳥○第四、三池(第五、

永井

第二十番 一脚競走 第一、李家○第二、奥山○第三、

中屋○第四、岸○第五、廣瀬

第二十一番 特別會員競走(一周) 此競走に出られたる

は菊池大麓、櫻井錠二、飯島魁、和田垣謙三、丹波敬三の

諸教授及永井書記官にして第一は櫻井、第二は菊池第  
三は永井なりし御苦勞さま

第二十二番 慰め競走(一周)

是は第三等以上の賞を得ざる者を慰める爲の競走なり  
し

終りて賞品授與式有り運動會よりは銀の賞牌(第一等よ  
り五等まで金又は四分一象眼等の差有り)を出し外に百  
ヤードにてストレンジ君賞品二百二十ヤードには前田侯  
賞品四百四十ヤードにはカトクトロ君、賞品八百八十ヤ  
ードには婦人賞品右何れも銀盃其外須田哲造君賞品及文  
部省諸君賞品等有りし

○專賣特許 農商務省ニ於テ專賣特許局ヲ創設セラレタ  
ル以來今日ニ至ルマデ殆ンド三ヶ年ノ中ニ特許ヲ得タル  
數ハ四百一號ニ上レリト云フ又昨十九年中ニ其處分セラ  
レタル成績ヲ掲グレバ左表ノ如シ又同局ニハ既ニ現品陳  
列所ヲ設立シ衆人ノ縦住ヲ許サル、由今其手續ヲ聞クニ  
同局ニ到リ先ヅ縦覽ヲ乞ヒ住所姓名ヲ帳簿ニ記セバ可ナ  
リト誰人ニテモ一覽シテ其利益鮮少ナラザルベシ



左表中出願數ニシテ特許數及ビ却下數ノ和ニ合同セザル  
 モノハ該年中處分未濟ノ分ナリ  
 明治十九年專賣特許願處分廳府縣別

	特許出願數	特許數	却下數
北海道廳	三	一	二
東京府	八三二	一七六	五三〇
京都府	六三	五	三六
大阪府	一〇〇	二	七〇
神奈川縣	四九	四	三四
兵庫縣	二三	一	一七
長崎縣	四	一	二
新瀉縣	一二	二	九
埼玉縣	二四	九	一一
群馬縣	二七	二	二二
千葉縣	二七	二	一八
茨城縣	七	一	三
栃木縣	五	一	三
三重縣	二	一	二
愛知縣	二六	一	一四

靜岡縣	二五	一	一三
山梨縣	九	一	四
滋賀縣	一〇	一	九
岐阜縣	六	一	二
長野縣	二	四	九
福島縣	四	一	三
宮城縣	四	一	一
岩手縣	二	一	一
青森縣	三	一	一
秋田縣	一	一	一
山形縣	三	一	一
石川縣	三	一	三
富山縣	七	一	四
福井縣	二	一	四
島根縣	二	一	二
鳥取縣	二	一	二
岡山縣	一九	二	八
廣島縣	一一	三	〇
山口縣	三	一	一

和歌山縣	一九	一	一三
德島縣	四	一	四
高知縣	三	一	二
愛媛縣	一二	一	八
福岡縣	五	一	三
大分縣	二	一	一
佐賀縣	三	一	三
熊本縣	三	一	三
宮崎縣	一	一	一
鹿兒島縣	一	一	一
沖繩縣			
總計	一三八四	二一六	八七六

○學海の海賊一名小家文集 今度法螺吹屋町の無頓着社より題号の如き雜誌を出版する由其趣意書に曰く  
 (前略)元來大洋を横行して商船等を取押へ己に属せざる物品を掠奪するを以て職業とする者を世にて海賊と稱し社會の容れざる所道德の許さざる所法律の罰する所となり居れ共是は實に誤れるの甚しきものと云ふべ

し海賊は商人の如き吝嗇なる者より財産を取りて諸港より入り之を酒色に費すを以て此等諸港の人民に取りては天に雨を得たるが如く實に海賊こそ慈善家と云ふべけれ流石に學海に於て此の如き僻なく諸學者の多年研究したる結果を一度雜誌に登録し或は多くの時間を費して記したる講義を一度公衆に對ひて演ずれを何人にてても其著者講義者に一言の斷りなく其出版元なる雜誌社に一行の照會もなく無遠慮に之を他の雜誌新聞紙上に登録して更に恥づる所なく大洋にては海賊視せられん者も學海にては反つて社會を益する杯誇るを得るなり實に快きと云ふ可きなり尤も歐米の如き野蠻國にては心ある者は此の如き所爲を恥づるとか聞く是即ち彼等の野蠻なる所以なり我社は世の中に立ちて何にかして一儲を爲さんと欲する者なれば我國中あるとあらゆる雜誌よりつまらなき論説は必ず之を我紙上より轉載し讀者の解し難き爲よ成るべく挿圖を減じ校正の鹿漏なるは勿論時としては無茶苦茶に横文字を並べ立て英語の如く見せかけ世の中を瞞着せんとするもの

なり故に心なき者は勿論苟くも世人の馬鹿と思はれん

者は須臾も座右に欠くべからざるものなり

但し第一號以後出版甚覺束なければ瞞着されんこと

を望まる、方は至急六ヶ月分前金郵送あれ

○帝國大學紀要 今般理科第一冊第四號を出版せられたり其論文は理科大學教授飯島魁氏の歐洲産の或る「トリクラダ」(渦蟲類の説)、同關谷清景氏の地震動の性質を示す雛形、同助教吉田彦六郎氏の顯花植物の灰分中の「アルミニウム」、同坪和爲昌氏の「ハイドロキシアミン」の定量上炭酸及曹達鹽類の作用、同教師シト、ヂー、ノット氏の大なる水晶球、同教授箕作佳吉氏の三崎臨海實驗所の記なり此にて第一冊は完結の由

○本社へ寄贈せられたる雜誌

○出版月評第三号

○交詢雜誌第二百七十五号  
第二百七十六号  
第二百七十七号

○教友雜誌第三号

月評社  
交詢社  
教友社

雜錄

スペンセル、フレルトン、ベヤド君小傳

松原新之助抄譯

君ハ一千八百二十三年二月三日ヲ以テペンシルウヱニヤ州ノリーディングニ生ル十一歳ニシテマリーランドノ「ポルト、デポシット、クエーカー、ボトル、デング」<sup>スクール</sup>學校ニ入り居ルコト一年轉ジテ「リीडینگ、グラランマー」<sup>スクール</sup>學校ニ移ル後又ペンシルウヱニヤノ「アルリスル」學校ニ入り一千八百四十年其業ヲ卒フ爾後數年間ハ志ヲ博物學ニ專ニシ諸國ニ週遊ス蓋シ動植二物ノ研究ニ從事セント欲シテナリ其一千八百四十一年ハ諸鳥類採集ノ爲メペンシルウヱニヤノ山ヲ超テ旅行スル二十一日四百「マイル」ノ道程ヲ行ケリ次年復タ旅行ヲ爲シ終始從歩シテ山川ヲ跋躋シ二千二百「マイル」ノ道程ヲ行ケリ君ガ此二次ノ旅行ニ於テ採収シタル各動植物ハ其數甚ダ多ク爲ニ設クル處ノ陳列場ハ實ニ後年「スミツニヤン、インスチテコーション」博物館ノ基本トナレリ君又醫學ニ志シ「ニューヨーク」ニ於テ醫學ニ從事シ「フィラデルフィヤ」醫科大學ニ於テ醫學博士ノ學位ヲ

受タリ

一千八百四十五年「ヂツキンソン」大學ノ聘ニ應ジ其博物學教授ノ職ニ當リ三年ノ後更ニ全校化學ノ教授ヲ兼ヌ

一千八百五十年六月「スミソニヤン、インスチテューション」ノ「アシスタントセクレタリー」(書記補)トナレリ後

一千八百七十八年五月進デ「セクレタリー」(書記)ノ正員トナル此時君ガ職務ハ頗ル繁劇ナリト雖モ執掌少モ惰ヲズ「スミソニヤンインスチテューション」ノ學事ノ旺盛ヲ

致セシハ君ガ力與カリテ多ニ居レリ其幹蠱ノ才識ハ當時世人ノ尤モ稱スル處タリ博物院研究所ハ君始ヨリ之ガ長ト

ナリ政府モ亦タカヲ此ニ用ヒ遂ニ諸般ノ報告通信ハ殊ニ完全ノ者ヲ見ルニ至レリ且君ハ一千八百五十年ヨリ同六

十年ニ至ルノ間政府ノ命ヲ奉ジ「インスチテューション」ノ爲ニ學者ヲ派出シ採集器具ヲ整頓シ及ビ採集ノ方法ヲ

設ケ其他畫工ヲ役シテ諸般ノ動植物ヲ圖セリ其ワシント

ニ歸ルニ及ビ齎ス處ノ諸標本ハ政府尽ク之ヲ君ノ管理ニ屬セシメ一ノ陳列場ヲ設ケタリ今現ニワシントン府ニ

アリテ米國々立博物館第一ト稱スル者是ナリ此一大事業

ヲ成シタルハ一ニ君ガ力ニアリト云フベシ

君又諸外國ト約シテ動植物交換ノ方法ヲ設ケ爾來遂ニ「インスチテューション」ノ至要ナル事業トナレリ凡ソ君

ガ事業中最モ著大ニシテ極メテ効績アル者ハ當時ノ大統領グランド將軍ノ拔擢ニヨリ水産調査委員トナリシニア

リ此調査委員ノ職ハ夙ニ議員ノ証認スル處トナリ大ニ其信憑ヲ得タレバ君乃チ諸々重要ノ魚類ニ就テ細カニ其研

究ヲ施シ凡ソ米國中何所ヲ問ハズ湖海河川共ニ水族消長ノ理由ヲ檢シ之ガ爲メ保護防害ノ方案ヲ制シ屢々之ヲ議

院ニ報告セリ然ルニ其事業ハ漸ク盛大増進ヲ促シ終ニ合衆國水産生物學及ビ水ニ屬スル理學上ノ研究、古今漁業

ノ方法沿革、水産物ノ製造及ビ其貿易上ノ統計、國中需要ノ食用、魚類ノ輸出入、魚類ノ繁殖手段等ニ至ルマデ尽ク

之ヲ調査スルノ必要ヲ覺ユルヲ致セリ是ニ於テ君ガ事業ハ已ニ輿論ノ公認稱揚スル處トナス

名聲全國ニ赫々タリ一千八百七十七年君政府ノ命ヲ奉ジハリファックス漁業

協會ノ評議員トナレリ此時養魚術ニ關スル諸説ヲ草シ其

論理ト實蹟ヲ述ベ世ニ益スルコト殊ニ少カラズ

諸威及瑞典國王曾テ其事業ヲ賞シテ某勳章ヲ君ニ贈ル

(一千八百七十五年)メルボートルン府ノ「アクリマチセト

シヨン」會ハ銀牌ヲ贈ル(一千八百七十八年)佛國「ワシエテ

ー、ダクリマタシヨン」モ金牌ヲ贈ル(一千八百七十九年)

伯林萬國漁業博覽會ニ於テ第一名譽賞ヲ得是蓋シ獨逸帝

國ノ特遇ニ出ヅト云フ(一千八百八十年)君又「ヂツキンソ

ン」大學ノ理學博士ノ學位ヲ受ケ更ニ「コロンビヤ」大學ノ法

律博士ノ學位ヲ受ケテ數年間該大學評議官ノ職ニ在リ一

千八百七十年以降「コロコラン」工藝館ノ評議官トナリ又

「コスモース」ノ會員タリ

一千八百七十六年「フィラデルフィヤ」府ニ開設シタル世界市

ニ於テ君ハ政府委員ノ一人トナリ水産物審査官ノ職ニ當

レリ一千八百五十年ヨリ一千八百五十一年ニ涉リテ「ア

メリカン、アツツシエトツヨン、フガル、ゼー、アドウエンス

メント、ヨフ、サイヤンス」ノ書記タリ此時君自ラ第四第

五第六三次集會ノ記事ヲ出版セリ且早ク己ニ「ナシヨナ

トルアカデミト、ヨフ、サイエンス」ノ會員トナリ其議員

ニ列シ且常ニ合衆國中重要ナル學會々員ノ中ニアリ其他

諸外國各學會ノ名譽會員タルコト枚舉スルニ暇アラズ君

ヲ著スコト尤モ多ク一千八百八十二年一月ニ於テハ己ニ一

千〇六十三種ニ上レリ

君又曾テ數年間「ハーパーズ、エンド、プロザース」ノ雜誌記

者トナレリ其他「リコトルド、ヨフ、サイアンス、エン、ドイン

ダトリ」ノ公報ヲ出版シ且「スミツニヤン、インスチチュ

シヨン」ノ年報モ亦概テ君ガ手ニ成レリ就中合衆國水産

調査所諸種年報ノ類ハ最モ君ガ力ヲ尽ス所ノ者タリ

本年六月君「マサチ、ユセツト」ノウーズボトルニ遊ベリ此

ノ地ハ諸水産調査委員ガ年々夏日ニ當リ務來リテ水産物

ノ研究ニ從事スル所ナリ蓋シ君ガ此行ハ其精神過勞ノ病

痾ヲ療養セント欲スルニ出タルヲ知ル 八月初旬ニ於テ

ハ稍ヤ輕快ヲ覺タルガ如ク日々該地水産實驗所ニ往復シ

タリ八月十九日夜病遽ニ革マリ忽然トシテ而シテ長ク逝ケ

リ噫君年ヲ享クルコト六十四

○

○南洋諸島巡廻記事

理科大學助教授 菊池 安

今回南洋諸島ヲ探檢スル爲メ燈臺局用船明治丸ハ去十一月一日横濱港ヲ出帆シテ三宅、八丈、鳥島、小笠原島ヲ經テ硫黃島ヘ航行シ十七日横濱ヘ歸港セリ余モ此一行ニ加ハルノ幸ヲ得タルヲ以テ學術上ノコトハ追テ別ニ報道スルコトナシ茲ニ航行記事ノ大畧ヲ記セン、

十一月一日午後四時横濱ヲ拔錨シ本牧沖ヘ掛リシ折天氣模様穩カナラズシテ航路ヲ轉シテ横須賀港ニ泊ルコトナレリ翌二日ニ至リテ天晴レ午後四時出帆八十海里ヲ經テ伊豆七嶋ノ内ノ三宅島近傍ヘ着シタレモ未ダ曉ニ至ラザレバ同島ヲ一周シテ漸ク三日午前七時半同島ノ北部ニ營ル伊ヶ谷村ノ港ニ碇泊セリ、三宅島ハ近代時々噴火セシ活火山ノ一ニシテ海中ニ孤立シ海岸ハ四方ヨリ襲撃セル風浪ノタメニ岩石聳立シテ上陸スルニ困難ナルコト少ナカラズ、海岸ニ露出セル黑色ノ岩石ハ玄武岩及屑碎石ノ累堆ノ成レリ全島ノ最高點ヲ雄山ト云フ海面方ノ高サ二千七百尺ニ達ス絶頂ニ噴火口アリト云フ最近ノ噴火ハ明治十七年七月三日ニテ同島ノ東部ニアル神着村ヘ熔石流レ出

テ全村其害ヲ被ルニ至レリト余ハ此所ニ至ラントセシモ暇ナクシテ伊ヶ谷村近傍ノ山腹ヲ巡回シテ歸船セリ午後十時四十分伊ヶ谷村ヲ出帆シ三宅島ノ南ニアル御藏島ノ東ヲ經テ四日午前四十分八丈島ノ西岸八重港ヘ着ス三宅島ト八丈島トノ間ハ六十余海里ニテ此間ニ黒潮ノ流レアリ船ノ動搖甚ダシカリシヲ覺エタリ、八丈島モ三宅、御藏島等ト同シク火山ニシテ其北部ニアルヲ甌嶽或ハ八丈富士ト云ヒ海面ヨリノ高サ凡二千八百尺ニシテ永正年間ニ噴出シタリト言傳フ又近代ニモ噴火セシコトアリト云フ、南部ニアルモノハ樹木繁茂シテ甌嶽ヨリモ古キ火山ナル可シ項上ニハ噴火口ノ遺跡アリト云フ又此山ノ中腹ニ硫黃谷アリテ目今硫黃製造ニ從事スル者アリト聞ク、此二山ノ間ニ少シク平坦ナル地アリテ諸村落散點シ蠶業及耕作ノ業起レリ八重港ノ西ニ營レル島ヲ小島ト云フ高サ一千八百尺ニ達ス此邊ノ海岸ハ三宅島ト同ク黑色ノ玄武岩ヨリ成レル嶮崖ナリ四日午後七時五十分八重港出帆八丈ノ南凡三十海里ノ所ニ青ヶ島ト名クル小島アリ又火山ノ遺跡ニテ此近邊ニアリテハ黒潮ノ流レ殊ニ甚ダシク撻量

多キ故ニ海水深藍色ヲ帶グ、八丈ヨリ百六十海里ヲ經テ

七時大村ヘ上空所ニ帶ルコト二日間、父島ハ南部ノ或ル

多キ故ニ海水深藍色ヲ帶ブ、八丈ヨリ百六十海里ヲ經テ五日午後二時半、鳥島へ着ス、鳥島ハ英國海圖ニ依レバセントピータース、アイランド (St. Peter's Island) ト名クル小無人島也時期アリテ全島ニ信天翁 (Albatross) ノ栖メルコアルヲ以テ之ヲ鳥島ト名ケタリト數年前某氏ハ此島ハ鳥糞ヨリ成レル者ナラントノ考ヲ以テ之ヲ探索セシコアリシガ折悪ク一羽ノ鳥モナク又鳥糞モ探リ得ザリシトゾ今回ハ幸ニノ數多ノ信天翁ノ群列ノ全島樹木ノ生ゼザル處ハ尽ク白色ヲ帶ブルニ至レリ、此島モ又火山ノ遺跡ニシテ外輪ノ一部存在シ、伊豆七島火山脈ノ一部ヲ成ス者ナリ此度ノ行ニテ内地及八丈島ヨリ此島へ移住ヲ試ル者十五人アリタレドモ其他ノ船客ニハ上陸ヲ許サザリシハ遺憾トスル處ナリ、五日午後七時鳥島ヲ發シ南南東ノ方へ進ムコト數十里ヲ出レバ北緯三十度ヲ經テ漸々温暖トナリ六日最高ハ華氏七十八度半ニ達シ海水ハ紅青色ヲ帶ビ海上頗ル穩トナレリ六日小笠原群島ノ内ノバアリー群島及ケトター島ヲ東ニ見テ午後十一時三十分小笠原父島ノ二見港ニ着ス、鳥島ヨリノ行程二百三十海里七日午前

七時大村へ上陸同所ニ滯ルコト二日間、父島ハ南部ノ或ル部分ヲ除キ火山ノ作用ニ依リテ成立セシ者ナレトモ三宅、八丈、等ノ如ク近代ノモノナラザル可シ故ニ噴火口ノ跡モ判然セザルモノ多シ又岩石モ主トシテ安山岩及其屑碎岩ヨリ成ル、九日午前八時再明治丸ニ乗込ミ二見港ヲ出帆ス午後零時三十分母島沖村ノ港ニ到リ(行程卅五海里)碇泊スルコト凡三時間、母島モ父島ト等シ、安山岩及火山灰ノ累層ヨリ成ル島、ノ南ニ圓錐狀ヲ備フル小富士ト名クル山アリ、午後五時沖港出帆母島ノ南百三十海里ヲ經テ硫黃島ニ着ス、今度ノ航海ハ此硫黃島ノ探究ヲ以テ目的トスル由兼テ聞傳タルコナレバ他ノ諸島ハ倍置キ此島ニ就テハ必ズ地理風土等ニ遺ス所ナク探究スルコトナラント思シニ豈計ラシニ僅々六時間ヲ經ズシテ最早此島ヲ捨テ、午後五時出帆ノ歸路ニ就クコト一決セラレタルハ少シク怪カシキ次第ナリト云フ者モアリキ、扱此硫黃島ト云ヘルハ英國海圖ニアル火山群島 (Volcano Islands) ノ一トシテ火山群島ハ三ツノ火山島ヨリ成ル最北ニアルヲアレキサンドロ

(Alessandro) トIM、中央ニアルヲ硫黃島(Sulphur Island)ト云、南ニアルヲサン、オトガスチノ(Dan Augustino)ト云フ、此内硫黃島ヲ以テ最大トナス北北西ヨリ南南東ニ向テ廣ク凡五英里ニ達シ、兩端ハ二ツノ火山ヨリ成ル其北部ニアルモノハ圓錐形ニシテ海面ヨリノ高サ六百四十四尺頂上ニ噴火口アリ硫黃ヲ出シ火山層ノ裂目ヨリハ蒸氣ノ發スルヲ見ル又麓ノ海岸砂地ヨリモ噴出スル處アリ、岩石ハ黑色ノ斑理狀ヲ呈セル玄武岩ノ一種ナリ南部ニアル火山ハ低クノ殆ンド平坦ナリ樹木生長スル所多ク北部ノモノヨリ古キモノト思ハル其内ニ噴火口モアリ又同行中蒸氣ノ發スル處ヲ見タル人モアリ此兩火山ノ間ニ凡一英里余ノ砂地アリ其下部ハ海中ニテ成リシト思ハル、成層砂層アリテ其上部ノ砂ハ尽ク三斜長石ノ結晶ト黑色ノ輕石碎片ノ堆積層ヲ成ス皆近代ノ噴火ニ依リテ噴出セラレタルモノナル可シ十一日午前五時半硫黃島ヲ發シテ北北西、四十海里ヲ經テサン、オトガスチノ近傍ヲ過グ此島モ火山ニテ海面ニ孤立ス其頂上ニ少シク平坦ナル處火口丘ノ一部ナルヲ知ルニ足レリ全島ニ草木生長シ海岸

峻峻ニシテ端船ヲ近クル所ナシ依テ上陸セズ午後八時半母島ノ沖港へ着十二日午前六時父島ニ見港へ着停泊スルコト二日十四日午後二見港ヲ發シテ歸路ニ就キ鳥島、八丈島、三宅島へ立寄リテ十七日横濱へ歸港セル記事ハ前ト大同小異ナレバ之ヲ畧ス他日詳細ノ記事ハ本誌ニ登載スベキヲ以テ今纔ニ紀行ノ大要ヲ述ブ

應 問

山形縣下飽海郡松嶺加藤氏ヨリ兩頭ノ蛇ニ就キテノ質疑ニ答フルコト左ノ如シ

理科大學内一動物學生

動物世界中蛇ニ限ラズ何ニテモ其跡ノ兩端ニ頭ヲ有シタルモノヲ慥ニ學者カ認タルヲ知ラズ學理上ヨリ考フルニ此ノ如キモノハアラレヌ理ナリ併シ古來ヨリ我邦ニテハ此ノ如キ動物ノアルコトヲ信シタルコトナレバ其形ヲ想像シテ石刻タルモノ更ニ怪ムニ足ラズ

社 告

東洋學藝雜誌第七十二號

明治廿年九月廿五日發兌



目錄

- 熱學講義第五回膨脹及三態變化 村岡範爲馳
- 耶蘇教擴張ノ新法 外山正一
- 鑛山の發見(前號の續) 渡邊 渡
- 貨幣ノ話 和田垣謙三
- 埼玉縣北吉見村横穴ニ付キテ 坪井正五郎

雜報

- チンドル氏ハクスレー氏○佐々木忠二郎氏○帝國大學紀要○毒性の繪の具○東京職工學校○ミルン氏○日蝕觀測の結果○束髮前髮○米國大學々生の費用○電信の百年祭○スミス氏○ウイールリアムソン氏の油繪寫眞○防火劑寄書

平野 師 應

雜錄

- 伊澤修二氏ヨリトツド氏ニ贈リタル日蝕皆既圖及書翰應問
- 本年八月皆既日蝕ノ際望觀セシ一二ノ現象
- 皆既日蝕ノ循環期
- 地球ノ平均密度ヲ測定スル方法

寺 尾 壽

寺 尾 壽

長岡半太郎

東洋學藝雜誌第七十三號

明治廿年十月廿五日發兌

目錄

- 日本の舊世界 理科大教學授 小藤文次郎
- 養子論 文科大學教授 外山正一
- 鑛山の發見(前号の續) 工科大學教授 渡邊 渡
- 孔學總論 谷 本 富
- 化學の變化 第一高等中學 久 原 躬 弦

東京農林學校 校教諭

佐々木忠二郎

雜報

- 伯林の裁縫學校○ヴルピアン氏○エツケル氏○米國理學獎勵協會○壞太利國文部大臣○スタンレー氏○獨逸國二三大學々生の數○ジョンズ、ホプキンス大學○生物學實驗場新設の企○第六十回集會○懸賞問題○プラウン、ハウフェル氏○火葬會○地之り○第二期大學通俗講談會
- 本社へ寄贈せられたる雜誌

批評

○吳文聰氏著統計詳説の評

雜錄

- 外國の地名を書くに漢字を用ふるの不便を再び云ふ
- 箕作秋坪君墓銘

本 郷 生

元老院議官 中村 正直

# 廣告

## 再版發行

志賀重昂君著

### 南洋時事 全一冊

定價金五十五錢  
但シ郵稅共

「頃來世人ノ耳目ヲ動カシ殊ニ商業社會ヲ震撼スルヲ絶大ナルモノハ南洋時事ノ右ニ出ヅルハ無シト云フ之ヲ繙キ閱レバ寔ニ其文ノ快暢ナル其詩ノ豪宕ナル、言文放漫ノ今世ニハ稀ニ見ル所ニシテ」出版月評「其地理ヲ説ク所ハ明細ナル地圖ヲ見ルノ思ヒアリ其山水風物ヲ序スル處ハ畫人ノ實景ヲ描寫シタルガ如キノ妙アリ而シテ」每日新聞「著者ガ親シク實地ニ就キ見聞ニ觸レシ事ノ苟モ工業上殖産上ニ於テ我國ニ關シ及ビ南洋大勢ニ關スル事柄ハ記シテ漏スナク論ジテ尽ササル無ク」報知新聞「將來日本ガ東洋貿易ノ中心市場タルガ如ク新西蘭ハ必ラズ南洋貿易ノ中心市場タル可シトテ此二島事情ヲ同フスルノ點ヲ列擧セザルガ如キ吾輩ハ其注意ノ懇到ニシテ説明ノ周密ナルヲ喜ブ者也」(經濟雜誌)「是レ豈ニ近來續々梓ニ上ボル所ノ雜書ト同シク故紙堆裡ニ埋没ス可キモノナランヤ」(朝野新聞)「故ニ一部ノ南洋時事ハ其購讀ヲ吝ム可カラズ」(時事新報)「獨リ日本人而已ナラズ外國人ト雖モ猶且一讀ヲ欠ク可カラザルモノトス」(ジャツパンメー  
ル新聞)

英國大宰相ピートコンスフ井ルド伯原著  
渡邊治君譯述

### 三英政海之情波

第四卷發兌

## 全四册完備

每册定價金八十五錢  
遞送料共九十五錢宛

近時出版の小説中原著結構の至妙と譯述文章の流暢とを以て有名なる政海之情波は曩に第一、第二、第三、の三册を發兌し非常の喝采を博せし處今般第四卷出版發兌致候第四卷は公子起て帝業を快復し寡婦料らす女帝の位に即き、青年俊才時運に際して大宰相の權威を握り、新婚の皇帝皇妃を携へて第二の郷里に歸るより或は憂國丹誠の政治家が病中政治を處辦して卒倒遂に黃泉の客となるあり或は又哲理を究め禪味に入り俗塵を脱したる貴縉紳が世外遊事の爲めに果敢なく一命を喪ふの奇談あり、奇意幻想の良人貞淑の閨秀と契り、快活豪宏の婦人亦深謀の政治家に配す、其他前三卷に端緒を開き又一斑を現はしたる一切の奇構一切の人物皆此第四卷に至りて大團圓を告げざるなし既に三册目まで御購覽の諸君は素より江湖の諸彦普く御愛讀被下度此段廣告仕候也

東京日本橋  
通三丁目

## 丸善書店

法學協會雜誌義本月ニ限り來ル廿八日ニ發兌爲致候間此段廣告ス

東京神田裏神保町一番地

## 澤屋雜誌部

各位益々御壯健奉賀候隨而弊店義追々盛大ニ趣候段江湖諸彦ノ愛顧ニ依リ候義ト一統奉鳴謝候右御禮之爲各印刷物ハ特別勉強仕リ殊ニ歳暮之際御名刺類ハ石版銅版并ニ活版等御註文ニ應シ府ノ内外ヲ問ハズ精々美麗廉價ハ勿論迅速調進仕候間多少ヲ不論御註文之程偏ニ奉希上候

## 澤屋蘇吉

